

フランドール・スカー  
レット(仮)に憑依した  
けどアイドルになった  
から歌うことにする

金木桂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

フランドール（容姿のみ）になったけど幻想郷でも紅魔館でも無いしアイドルになることにした。お姉様みたいなスーパーアイドルを目指して頑張ろうと思う。

# 目次

私がアイドルになった日	1
私がトップアイドルを目指し始めた日	22
プロデューサーは酒を飲み語る	42
アイドル見習い二人娘	64
アイドルとしての試練	79
始まりの場所	101
アイドルとモデルと女子高生(?)	126
アイドルいんぎすくーる(未デビュー)	148



# 私がアイドルになった日

私がフランドール・スカレットになったのはもう10年も前のことだ。

生まれて直ぐこの名前を聞いて私は気付いた。フラン、と言えば東方projectのキャラクターであると。何でそう自覚できたのかは正直よく分からない。そのまま良く分からないとスルーするのは簡単だったけど、その事実は紅一点と頭にこびりついて離れなかった。他でもない自分のことなのだ、気にならないはずがない。

それ以外にも幼稚園の頃から自分の精神の円熟さ加減には違和感があった。だって他の同年齢の子と言ったら自律心が芽生えているのかすら疑問だったし、そこで色々苦労もしたりしたんだよね。思い出すと恥ずかしいけど、ちよつと懐かしい。

その後幼稚園の子供はそれが普通であると知って、益々自分の特異さに私の中の不可思議が加速して。

——だから、当時の私は更に真剣に自分のバックグラウンドを探ることにしたんだよね。

スカーレット家。

元はイギリスのウェールズが本拠地らしいけどお父様とお母様の結婚を境に何故か日本へ移住したらしい、とお姉様は何時も浮かべているにこやかな表情をこの時だけは潜めて淡々と言った。

少なくとも私より5つ上のお姉様、レミア・スカーレットが生まれた時にはもう日本にいたとのこと。お姉様もその引越しの理由をいぞ知ることは無かった、そもそも知ったのも比較的最近であると言っていた。

私のお父様とお母様は故人だ。2年前に交通事故で他界して以降、都内の無駄に広い家でお姉様と二人暮しをしている。

葬式の際にイギリスに住んでる一回も会ったことのない親族が家に来ないか？と言ってきたけれど……まあ、中八九遺産目当てなのは目に見えていた。それはお姉様も同じだったのだろう、断りの手紙を書きながら「バーカバーカ、吸血鬼に血を吸われて干からびちゃえ」と子供みたいに毒吐いていた。吸血鬼はお姉様なんだけどねえ……、とも思ったけどこの世界のスカーレット家はただの人間なのだから可愛い言葉だ。幻想郷のスカーレットなら本当にそうなっちゃうんだし。

とまあ。

そんな感じで10年間。モラトリアム期間真っ只中の青年みたい、自分の中に芽生

えていた漠然とした違和感の正体を探るため自分探しの旅もしたりして。

——その結果。な〜くも分かんなかった。

うん。これっぽちも掴めなかったね、手掛かり。何もわかんないや。

違和感に手を伸ばしてもすぐにその虚像は透けて消えて、冷たい空気が右手を包み込む。今じゃ半ば諦めてるもん、これ。それに自分探しの旅って何？馬鹿じゃないの？そんなのただの自己陶醉でしょ、自分の存在なんて鏡を見れば確認できるじゃん。

まあー。そういう訳で私の熱意はシャボン玉みたいに見事に弾けちゃった訳で。

「ん〜、ポテチうま〜」

ゴロンゴロン。

我ながらそんな擬音が出そうな程ぐでぐでと転がっている。まるで芋虫。いや芋虫は自分でも嫌だなあ、うん。例える生きもの間違えた。

こんな生産性皆無の行動をしているのも何もかも暇が悪いのである。暇なのだ、ひまひま。

今の私は10才の可愛い女子小学生。一応小学校の宿題なんて可愛らしいものもあるけど、私に掛かれば魔法みたいに一瞬で終わらせる事ができる。別に本当に魔法が使

えるとかそういう御伽噺話みたいな理由じゃない、幻想郷なら未だしもここには魔法なんてないからね。ただずっと出不精だった私がする事と言えば本を読んだり勉強したり、そんななんぼつかだっただけで。

しかもこれも不思議な事に、一度学んだことは今のところ直ぐに、完璧に理解できてしまう。んゝこれも違和感の一つなのかな？と思ったりもしたけど今となれば多分私が高頭良いだけだと確信しちやっている。言葉にするとナルシストだけど、私の中の何かと区別するためにはそう言語化するしかないのだ。

……とかとか。

難しいことはさて置いて。

「紅いゝ月夜にゝ」

転がりながら適当に歌ってみると、思った以上に可愛い声が響いた。歌上手いよねゝ私、前世は歌手かも、と自我自尊しつつ拍手してみる。歌手とオーデイエンスの兼役とは如何に。パチパチとやる気なく手が打たれる音に、何だろう。とても虚しくなってきた。何やってんだらう私。

「……うゝん、クツキー食べたい」

よいしょつと私は身体を起こす。その背中には私の知識とは違って、虹色の宝石が輝く蝙蝠みたいな羽は無い。そりやそうだよ、私は人間だから。ついでにお姉様も。



私はただのフランドール・スカーレット。住所は東京。種族は人間だ。

—————

びとびとびと。

鉛のように降り注ぐ雨に、思わず溜息を吐いた。

おやつをコンビニまで買いに行ったのは午後五時くらいの話だった。

晴れのち雨、なんてお天気リポーターの言葉を一切歯牙にもかけずに私は日傘と財布一つで外へと飛び出した。空を仰ぎ見れば藍より青く、雲はあんまり見えなかった。

吸血鬼でもないのに日傘を持って行くのは、多分知識としての私がそれ無しで太陽へと肌を晒すのを忌避しているからだろう。まあ個人的に肌を焼きたくないというのもあるだろうし、後日傘の影にすっぽり入っていると自然と心が落ち着くというのもあるかもしれない。つまりその点においては特に深く考えていないフランちゃん（10歳）なのだ。

コンビニまでの道のりは暴徒に襲われることが無ければ妖怪に遭遇することも無く、

ましてやヴァンパイアハンターを見かけることもなく、非常に平和なものだった。それもそうで、一応私の住んでいる地域はそこそこ高級住宅地だから治安が良い。なので変な人間は滅多に見ない、自己顕示欲の強い面倒臭いセレブマダムとかはその辺を跋扈してるけど気にしなければ害は無い。

なのに。なのになのである。

何でコンビニから出たら空はどんよりと黒く覆われて、バケツをひっくり返したような雨がばちやばちやと降り注いでいるの!?

コンビニに入った時は全然雲すら見えなかったのに！これが最近噂のゲリラ豪雨という奴だろうか……自分の運の無さにちよつと落ち込む。

「はあく……」

本日二回目の溜息。思わず右手に握り締めた日傘を見た。

フリルが可愛らしくあしらわれた赤い日傘は残念ながら雨天時に使えない。防水加工がされていないからだ。その代わり風通しが良いから夏の暑いときはとても重宝するんだけど、こういう状況下では形無しなのだ。なのだ……（現実逃避）。

さて。

どうしよう。このまま雨に濡れて帰るのも選択肢の一つ、とは言ってもこのお気に入りのおスロリドレスは濡らしたくない。これは無しで。

お姉様を携帯で呼び出すと言う手もある。……でも今日はお姉様は仕事で家に居ない、帰るのも夜遅くとか言ってたしあの銀髪ロリ。最近は忙しいとか言って帰るのいつも遅いんだから……。思考が逸れたけどこれもボツ。

傘を買うのもアリだけど、今月のお小遣いを鑑みたら無駄な浪費は避けたいんだよね。うん、これも止めよう。

と言う訳で私の取れる選択肢は一つ。雨が止むまでしつとり待とう！作戦、通称ヤシマ作戦である。決してこの間見たSFアニメが面白かったとかそういう事実は無い。それをハラハラドキドキと見ていたお姉様が言葉に出来ないほど目がマジで、思い出してつい笑っちゃったという事実もない。うん、話が逸れた。

まあ実際これが一番効果的な選択だと思う。ゲリラ豪雨なんて一瞬馬鹿みたいに降って、直ぐに晴れるのが定石だしね。思いながら私は槍みたいに鋭利にコンクリートを穿つ雨粒をジツと眺める。

……………。

スマホで確認すると、待ち始めてから5分経ったっぽい。だけど雨は依然、向こう一年分の水分を大地に吐き出すかの如くザーザーと降り注いでいる。止む気配、ナシ。それどころか風まで出てきて、轟々と豪快な音を立てて吹き荒れ始めてるんだけど。

ニュースサイトを見れば電車も止まってしまったらしい。……もしかして、待っても晴れない？

このまま何時まで棒立ちしていれば良いんだろう……。

鬱屈とした気分です店先の屋根の下で案山子のように突っ立っていると、ウィーンと自動ドアが開いて店内から男の人が出てきた。

……… 凄い相貌。強面という言葉はこの人の為にあると思わされるほどだ。何とか、堅気に見えないし出来れば関わり合いになりたくないなあ。

そんな事を考えていたのが悪かったのだろうか。大きな図体を此方に向けて、ずんずんと進んでくるではないか。脳裏ではその足音が怪獣みたいにズシズシと言ってる。

……あつ！分かった！私の前にあるタバコの吸い殻を入れるゴミ箱の前でタバコを吸うんだね！なるほどなるほど、どうぞどうぞ！

ずっと私は横に逸れると、その男の人は追うように45度方向転換。うーん、ミ사일並みにホーミング性能高いねこの人。てか私の命運、終わったのでは？短い人生だったなあ……と無理矢理走馬燈を浮かばせる。でも何も脳裏には過ることは無かった。友達いないのが悪いのだろうか、何だろう。また悲しくなってきた。

なんて考えている間にも怖い人は歩みを止めない。いざとなったら反撃しよう！と思っても、ただのフランである私はぎゅつとしてどつかくん☆なんてことも当然出来な

いのだ。頼りになる防犯ブザーは今は私の部屋の引き出しの中、今度からは24時間持ち歩くことにしよう。今度があるかどうかはともかく。

何時でも逃げられるように戦々恐々と構えていると、男の人は私と目線を合わせるようにしやがみ込んだ。自然と瞳が交差する。

「突然すみません。今少し、お時間ありますか？」

「……えっと」

その熊みたいにがっしりとした胴体と、ヤから始まる反社会的組織を連想させる顔から繰り出された言葉は非常に丁寧なものだった。

私の返答を待たずに、男は滑らかな動作で自分の懐からカードみたいな長方形の紙切れを取り出した。

「申し遅れました。私、346プロダクション所属の武内と申します」

「(う) (う) 丁寧にどうも」

呆気にとられながら、反射的に受け取ってしまう。良く見れば名刺だった。

男は慎重に、小さな子に絵本を読み聞かせるみたいに言った。

「……アイドルに興味はありませんか？」

「アイドル……？」

偶像。idol。あいどる。アイドル。

……あ、アイドルか。かなり混乱しちゃった。

「興味……って。もしかして私、スカウトされてるの？」

「その通りです」

真剣な顔で、武内は言った。

にしても、アイドル。この顔で本気でアイドルをスカウトしてるとでも言うのかしら？

確かに見た限りでは紳士的な対応で私の様子を伺っている。だけど普通に考えよう。鋭い三白眼の厳つい顔に黒スーツの上からでも分かるほど筋肉が付いたガタイの良い身体。あと黒サングラスがあればもうストレートフラッシュでヤのつく社会組織の一人にしか見えなんだよね。

何が言いたいかといえ一言で。

胡散臭い。

控え目に言つて不審者だ。お姉様ならきつと「ギャーヤクザー！」と甲高く叫びながら逃げるくらいには怪しい男だ。

風はピューピュー、雨はざあざあ。

全然収まる気配の無い荒天を一瞥して、私は受け取つた名刺をそつと吸い殻入れの上に置いた。武内が疑問に思う前に、私は一礼する。

「ごめんなさい！私アイドル詐欺には興味ないの！」

覚悟を決めて私はダツと雨のカーテンに飛び込んだ。「待つて下さい！せめて名刺だけでも……！」と必死に引き止めようとする武内に内心、本物だつたらちよつと申し訳ないなあ、と思いつつ、どうせ偽物だしいつか！と私は水溜まりを踏み抜きながら家へと走つた。おかげで服はぐしゅぐしゅ、髪の毛もずぶ濡れ。へつくちゅ！、とクシヤミまでしてしまつた。風邪を拗らせなければ良いんだけど……。

なにせよ、今日は厄日だ。

—————

翌日、放課後。

「アイドルに興味ありませんか？」

通学路の途中。また武内とエンカウントした。自称アイドル事務所勤務の不審者だ。今日も昨日と同じようにスーツを着こなし、随分大きな図体を小さく屈めて私の視点に合わせている。

「だからアイドル詐欺には興味無いよ私」

「あの……昨日も仰ってましたけどアイドル詐欺とは？」

「うん？ああ、原宿とか渋谷に良くいるアレだつて。アイドルを勧誘するふりして、なるには事前金が必要だーとか適当言ってお金を受け取ったら蒸発するやつ」

余談だけど今をときめくJKであるお姉様はこれに2回捕まっている。元からアイドルだから被害には遭ってないけどね。

私の身内に引っかけた人間はいないとは言え、夢見る中高校生は結構騙されてしまうようだ。この手の詐欺は騙される方も迂闊とはいえ、それ以上に人の夢や期待を踏み躪る似非スカウトマンが一番許せない。

武内は口を開いた。

「……やはり、私の事は信用できませんか？」

「まあ、それは」



その巨体のつむじから靴の足先までジツと眺める。うん、どこに出しても恥ずかしくない不審者だ。

意を決したように武内の目尻に力が入る。

「この後少しお時間ありますか？」

「うん……」

ぶつちやければ暇だ。どうせ家帰つてもすることはないしね。

でも着いて行つたところで、その先が変な場所だつたりする可能性も無くはない。外見と行動を考慮さえないしなければ紳士的な男であるのは十全に理解できたけど、如何せん見た目は普通のそれじゃないし、2日連続で遭遇しているのも偶然とは思えない。いや昨日のは本当に偶々なんだろうけど、今日のは多分違う。恐らく待ち伏せされてたんだと思う。……女子小学生を待ち伏せしてゐるって現状だけでかなり危うい事案であると武内は思わないのかな？

うん。悩む。

見た目と言動がここまで一致しない人間も珍しいしなあ、と思つて黙つてゐると武内は懐から再び名刺を取り出した。

「まずは名刺だけでも、お受け取りください」

「ま、まあ名刺くらいなら」

なんて言ってるうちに「まあ2万くらいなら」に発展しちゃうのだろうか。社会って怖い。

名刺を今度こそちゃんと見てみると346プロダクションと書かれている。346プロと言えばそういう話題に無頓着な私でも名前だけは知ってるくらいに芸能事務所の中でも超大手だ。つまり武内って完全に本物のスカウトマン？

仮に人を騙す為の肩書きだとしても、そこらのチンピラが超大手の名前を使うのは具合が悪いはずだ。それを346プロが知ったら黙ってないはず。すぐに威力営業妨害だか信用毀損だかで現行犯逮捕されちゃうだろう。

「……うん、わかった！でも人通りの少ない道入った瞬間コレ鳴らすからね」

今日こそはと持ってきたコウモリの形をした防犯ブザーを片手に言うと、「……承知しました」と武内はどこか引き攣った表情をしながら立ち上がった。

武内に連れられて来たのは昭和感の漂うとあるデパートの屋上だった。

昔はきつと小さな遊園地だったのだろうことが伺える。でも今ここにあるのはちっぽけなフードコートと、申し訳程度に備え付けられたステージだけだ。

「……………」

「私の担当しているアイドルのライブです。あと数分ほどで始まるのでお待ち下さい」  
武内が舞台の前に並べられたパイプ椅子の1つに腰を掛けるのを見て、私も隣に座る。

ガランガランという訳じゃない。むしろ、そこそこ人は入っている。空席はあるけどそのくらいは誤差だろう。

「……アレ？武内ってアイドルスカウトマンなんじゃ？」

「はい。私はスカウトもやりますが、本職はアイドルのプロデューサーです」

「プロデューサーって？」

「簡単に言えば、皆さんをトップアイドルにする為のお手伝いをさせていただく仕事です」

ヤバイ、全くそうは見えない。鷹みたいな双貌とか人殺してそうだもん、絶対に言わないけど。

でも。これがホントだとしたら、武内って結構上の役職なのでは？スカウトマンなら下っ端でもやりそうだけど、プロデューサーなんて下っ端がやる仕事じゃないでしょ。それどころかプロデューサーなのに新しいアイドルを自己裁量で雇えるくらいには立場があるのかもしれないと考えると……。

「……その手の悪徳業者と思っちゃってごめん武内」

「……………いえ、お気になさらず。いつもの事ですので」

あ、滅茶苦茶気にしてるコレ。自覚はしてるんだ。

「えくつと、そう言えばこのステージにはどんなアイドルが出るの?」

「とても可愛らしい魅力的な女の子たちです。まだ駆け出しですが、将来有望です」

「そっかあー」

可愛らしいという言葉が容姿だけではなく他のモノにも係っていた気がしたけど、それを考察する前にステージの天井照明がパツと付いた。それと同時にアイドルが3人、裏から元気一杯と手を上げて出てくる。

「頑張ってください……」

武内がそう小さく呟いたのが聞こえる。

本当に、この人はプロデューサーなんだな……と今更ながら感じてしまうほどその声には感情が籠もっていた。

ユニットのリーダーらしいセンターの女の子がマイクを握りしめる。

「こんにちわー!今日は私達の歌を存分に聞いて、楽しんでいって下さい!」

瞬間、スピーカーから音楽が鳴り渡る。岩を砕くようなアップテンポなリズムに歌詞が乗って、波のように私達のいる場所まで轟く。

——気付けば、魅入っていた。

一挙手一投足に引き込まれ、五感全てが揺さぶられるような感覚。これがライブの熱量……！！

一生懸命に踊り歌う彼女たち、周囲のファンの声援を背に私は幻想を視た。

幻想。普段は存在しない、胡蝶の様に消え散ってしまう不思議な空間。一石でも投じてしまえば忽ち霧散してしまいそうな雰囲気、心が自ずと非日常と言うベールに包まれる。槿花一朝の夢という表現はきつと正にこれを表すのだろう。この瞬間だけは、彼女たちがこの場の主役で——正直、羨ましい、なんて感情すら湧いてきてしまうのに戸惑ってしまう。でもそれも当然なのかもしれない。咲き誇る花々はまだ蕾ながら、心から嬉しそうに舞っているのだから。デパートの屋上という小さな箱庭で粗末なパイプ椅子に座っている事すら感じさせない情熱的な演技で、ステージに咲くアイドルはまるで蘭の花弁みたいに可憐に力強く咲き誇る。

たった30分。

どこか懐かしい時間は魔法みたいに過ぎ去ってしまった。

とても疲れているはずなのに、舞台袖に捌けていくアイドルは例外なく笑顔で手を振りながらステージを後にしていく。

呆然と見送っていると武内が口を開く。

「どうでしたか？」

「どう言うべきなのかな……ううん、どんな美麗な字句を使っても陳腐になっちゃう。だから単純に！凄かった！」

「それはとても良かったです」

「うん、連れてきてくれてありがとう！」

「いえ……。それでですけど、アイドルに興味湧きましたか？」

「ううん、それは分かんないや！正直駆け出して聞いて舐めてたけど、あの人たちはそんな事を感じさせないほどキラキラつてお星さまみたいに輝いてた。……あんな凄いこと、私に出来るのかな？」

不安、というよりこれは疑念。

傲慢じゃないけど私は学校や買い物以外だいつも家に引きこもっている。やることと言えば読書か勉強かゲーム、そんな私にアイドルなんて勤まるのだろうか……なんて疑懼はどれだけ誤魔化しても払拭できない。

その時、武内に肩を優しく掴まれた。ふと目が合う。

「出来ませす」

「武内……？」

「私は貴方に可能性を感じました。ただのアイドルに収まらない、トップアイドルの器を」

「トップアイドルかあ……」

武内のその力強い言葉に、無意識に考えてしまう。

……でも、イマイチ想像できない。良く考えてみれば芸能とかあんまり関心なかったからアイドルとか全く良く分からないし、それもそっか。

「……トップアイドルつてもっと大きなステージで歌って踊るんだよね?」

「はい」

「それってどのくらい大きいの?」

「アリーナクラスなら一万人ほどは入ると思って下さい」

「そんなに入るんだ!?!」

思わず辺りを見回してしまう。

このデパートの屋上じゃ200人入ったら限界かな。それでも聴衆の前で人事を尽くして天命を待つのは尋常じゃないプレッシャーが掛かるはず。……ってこれは何かの本で読んだだけけど、まあ少なくとも今の私じゃできそうにないや。

「……あの子たちも何時かはそんな豪華絢爛なステージに立つのかなあ」

「未だ分かりませんが、私はプロデューサーとして全力でサポートさせて頂きます」

「ふん。因みにもしだよ? 私がアイドルになったらフランの事をプロデュースしてくれるのは武内なの?」

「申し訳無いのですが、その時は別のプロデューサーが担当することになっていました」  
「え？何で？」

「今担当しているアイドルで現在手一杯ですので……本当なら私がスカウトした以上責任持つてそのサポートをしたい所なのですが」

「へへ、いや気にしないで！私も気にしてないよ！あと武内怖いし！」  
「怖い………ですか」

あ、余計な事言っちゃった。今度は見るからに傷ついてる。まあでも本当に怖いし仕方ないよね。残酷な事実だって時には必要なのである。

武内は小さなステージを感傷的に眺めると、私の瞳をジッと見つめる。

「先程の話ですけど、もし良ければアイドルになりませんか？」

「うへへ、そうだ。もう一つ聞きたいことがあったんだ」

「何でしょう？」

「なんで私をアイドル勧誘したの？」

「笑顔です」

武内は間を置かず即答した。………笑顔？

「私、武内の前でそんな笑ったことってあったっけ？」

「昨日、土砂降りの日にコンビニの外で立っている貴方が見えました。失礼を承知で少



しばかり中から覗いていたのですが、その時微笑んだ顔に確信したのです」

それは全く覚えていない………けど真剣な表情を見ると本当のことなのだろう。

それにしても、笑顔。笑顔かあ。

あの小ライブを観る前までの私だったら、これを聞いて「は？」と生返事を返していたかもしれない。笑顔って、それがアイドルに一番重要なものなの？と思っちゃっただろう。

でもあのライブを観た私はそれが否であると理解できる。出来てしまう。

だって楽しそうに歌うあの子たちはとても魅力的で、自ずと惹かれるものがあつた。太陽みたいに眩しくはなくても、夜空に浮かぶ北斗星のように遠望と輝いていた。それを見ちゃったら笑顔という要素がアイドルに不可欠であることは認めざるを得ない。私はそんな笑顔に魅入られてしまったのだ。

……それに、そろそろお姉様だけに負担を掛ける訳にもいかないしね。

「……分かった！フランもアイドルになってあげる！だからどうしていいか教えて！」  
「ありがとうございます。では名前を教えてくださいだけじゃないでしょうか？」

あれ、まだ言っただけじゃなかった。そう言えば言っただけじゃなかった気がする。

「ホンと、一回息を吐いてっど。」

「私はただのフラン。フランドール・スカーレット。スカーレット家の次女だよ」

## 私がトップアイドルを目指し始めた日

日曜日。

我が家では珍しく仕事も学校も無いお姉様がグダグダと居間のソファで転がっていた。

「あく疲れたらフララン甘えさせて〜」

「はいはい。昼ごはん作ってるから待っててね」

「嫌だ〜今構ってよフララン〜」

何この面倒くさい姉ガキ。頬叩きたい。やらないけどさあ。

パスタを茹でながらピーマンや挽き肉や玉ねぎを炒めていると「フララン〜？フラランフララン〜フララン〜」とか怠絡みされたけど無視。無視が一番の良薬になるのだ。多分。

「ねえ〜フララン？そう言えばこないだの私のCD聞いた〜？」

「あつアレね。まだその机に置きっぱなしになってない？」

「受け取ったまま放置してる!？」

「放置はしてないよ？邪魔だったから端には寄せたけど」

「妹の愛が歪んでて辛い」

いやまあ一応聞いたけど、恥ずかしいから言わない。お姉様は調子に乗ると面倒だからね。

そうそう。

お姉様、レミリア・スカーレットはアイドルだ。本人はカリスマアイドルと自称しているけど、どちらかと言えば時折見せるポンコツっぷりで人気を博している。あと所属は346プロじゃない、どこだったっけなあ……まあいつか。

そんな立場もあってお姉様は非常に忙しい。暇な日は芸能関連に寛容的な高校に通って、更にレックスンや仕事とやることばかりなのだ。だからこのただっ広い家の家事全般は自然と私がやっていたりする。家事ついでにとっかにメイド落ちてないかなあ、とか偶に探しているけどこればかりは諦観なのだ。んくもうちよつと狭い家に引越したい。

「そう言えばプロデューサーは今日来ないの？」

「ええ。何でも大手芸能プロダクションがアイドル事業部を作ったあの噂では大規模プロジェクトが進んでるだの何だので色々と対策に追われてるらしいわ」

「ふん」

全く……こつちの方がアイドル部門自体は古いからどっしり構え出ればいいのに、と

お姉様は溜息を吐いた。

もしかしなくとも、346プロのことだろうね。大手の芸能プロなんてそう多くないし、新設だからこそ私もスカウトされたんだろう。

「まあいいや。それより出来たから皿運んで」

「私とこのソファは永久の赤い糸で結ばれてるのよ?」

「だから何」

「うゝ動きたくないゝ疲れたゝ」

「そっか。昼飯食べたくないって言うんならそう言ってくれば良いのに」

「ちよつと待った!手伝うからそれは止めてフラン!」

必死だ。

我が姉ながら必死過ぎる。

元からお姉様の分をどこかにやろうとは考えてなかったの、パスタが盛り付けられた皿をトコトコと急ぎ足でやって来た姉に渡す。「サンキュー愛してるわフラン」と調子の良いことを言ってきたので「あ、お姉様の好みに合わせてタバスコ瓶入れといたから」と返すと涙目になった。これがお姉様の一番可愛い表情(セールスポイント)である。

「ウソだつてウソ。安心して?」

「ビツクリするじゃない……止めなさいよお……」

「ごめんごめん」

少しやり過ぎたかもしれない。もうカリスマブレイクしちゃった。

食卓の準備を終えると、頂きますと手を合わせる。日本生まれ日本育ちの私達に隙は無いのだ。容姿はともかく。

「そう言えばお姉様、レギュラー番組持ったってホント?」

「ええ。と言つても深夜番組だけどね」

「てことは撮影も夜?」

「女子高校生よ私!録画に決まってるじゃない」

「あ、そっか」

遂に身内がテレビの常連入りと思うと……特に何も無いや。うん。私あんまりテレビ見ないし。

「ねえねえ。どんな番組なの?」

「普通のトーク番組よ。ゲスト呼んで色々話すアレよアレ」

「それ面白い?」

「それ本人に聞いてみよう?」

普通に困ったような表情を浮かべる。

深夜番組……流石に一度も観たことないなあ。早寝早起きだし。

「ん〜でも、それだとまた忙しくなっちゃうね」

「まあ、そうね。今でもラジオ番組が1つ、それに不定期でライブとバラエティ番組もあるし……疲れるわあ」

「食事中にぐだつとしないですよ。いつものカリスマキヤラはどうしたの」

「今日はアイドル閉店の日」

「困ったお姉様だわ」

アイドルに閉店も何もないだろうに。特にお姉様くらいに有名になるとプライベートで外へ出るにも気を付けないと週刊誌にリークされちゃうし、常に糸は張ってないといけない。

と、そういうええ言わなきゃいけないことがあつたんだつた。

「お姉様お姉様」

「はいはい何かしらフラン？」

「私もアイドルやるから」

「へえ〜アイドル。良いわねアイドル。……………アイドル!」

コツンとお姉様の持つフォークが食器に当たった。そんなに驚くことかな？

「うん。何かスカウトされちゃった」

「誰よ私のフランを奪った野郎は!」

「私はアンタのフランじゃないよ」

「クツ……! 確かにフランは可愛い……迂闊だったわ! てつきりアイドルとか興味無い  
と思つてたのに、知つてれば私のプロダクションで確保したのに……!」

「あの、もしもーし」

聞いてない。何だか自分の世界に入り込んでるみたいだ。

しようがないので後ろに回つて頭を叩くと「イデッ」と呻いた。

「理解? おけ?」

「ムググググ……はあ。仕方無いわね」

「ごめんねお姉様」

「謝らなくてもいいわよ、どうせ私の一存じゃ決められないし。それよりこの話プロ  
デューサーにはしたの?」

「いやまだこれから」

お姉様のプロデューサーが何故私に関係してくるのかと言えば、端的にこのスカ  
レット家の保証人になってくれているからだ。

私とレミリアお姉様は未成年で、二人暮らし。お父様もお母様も亡くなっている以上  
大人の助けが無いと生きていけないのである。

その時に手を差し伸べてくれたのが当時からお姉様のプロデューサーだった人で、何やかんやと今じゃ週一は必ず泊まりに来るほど面倒見が良い。とても善人だ。

ただ、ほんの少しネックもある。

「ただなあ……私346プロなんだよね……」

「あちゃー。それはあの人キツめの発狂をするかもしれないわね」

「え？」

「プロデューサー、あと2年くらいしたら貴方のことをアイドルとしてスカウトしようとしていたのよ。だからそれを横取りされたと感じても可笑しくないわ」

「えー」

あの人そんなこと考えてたのか。全く知らなかった。

「それにプロデューサー、346プロはあんまり好きじゃないのよね」

「ほえ？何で？」

「良く知らないけど大学卒業して新卒で入った会社らしいのよ。転職して今の事務所なんだけど、辞める前にいざこざみたいなのがあったらしいわ」

あの普段温厚なプロデューサーがいざこざ、かあ。

相当腹に来たんだろうけど……何だろう。全く想像出来ない。

「まあそう言う訳だから覚悟しておきなよ。あ、でも今からウチの事務所に来てもし



「このよっ。」

「それは辞めとく。申し訳無いし」

「チッ」

何この姉、舌打ちしたんだけど。私より情緒不安定なんじゃないの。

「ところでフラン、この後暇？暇よね？実は見たい服屋が最近溜まってて」

「あごめんお姉様。この後予定あるんだ」

「……え？ちよつと。私完全オフの日次は来月なんだけど」

「ごめんお姉様。どうしても外せない用事なの」

「……因みに聞いても良いかしら？」

—————

美城プロダクション本社ビル。

東京の一等地、駅から徒歩数分の場所にある地上30階建ての施設は雄弁とその歴史を誇示していた。

「で、デカイ……」

芸能事務所って言うからもつとこざっぱりした感じの建物を想像してただけど……、流石老舗って感じがする。

何時までも田舎者みたいに摩天楼を眺めている訳にもいかないので中に入る。

今日は契約書のサインと担当プロデューサーとの顔合わせである。日曜日だと言うのにアイドルプロデューサーは休めないらしい、ご愁傷様。

受付で手続きを終えると、渡された来訪者カードを首に掛ける。27階に小会議室があるからそこで顔合わせを行う、とのことなので素直にエレベーターに乗る。

「フランさん、おはようございます」

「うわーって武内じゃん。突然後ろに立たないでよ」

「すみません」

いやほんと驚くから。ヌツと現れないでほしい。

「日曜なのに仕事なの？」

「はい。アイドルのイベントは土日祝日が多いので私も休む訳にはいかないんです」

「大変なんだねプロデューサーって」

「その分やり甲斐のある仕事です」

「へー。私もプロデューサーになろうかな？ スカーレットPとかカツコイイし」

「アイドルをやつて下さい」

至極真つ当な正論だった。反論の余地も無いや。

エレベーター内で武内と別れて27階で降りると、取り敢えずフロアマップを確認してみる。外観はとも大きくはたけどそれは中身も比例してるようで、この階だけでも小会議室はたくさん点在していた。

日曜だというのに話し声があちこちから聞こえる廊下を歩く。どうにもどの小会議室も使われているみたい、武内といい346プロには働きの者しかいないのだろうか。

3分くらい進んで、漸く受付の人に言われた小会議室に到着する。コンコンとノックすると、「どうぞ」と間延びした言葉が返ってきたので遠慮なく入る。

椅子の前に立っていたのはスラツとしたイケメンだった。癖があった茶髪に見定められるような細い目、それでいて口は弧を描いている。……武内Pとはまた違った胡散臭さがあるね、私つてもしかしてそういう縁でもあるんだろうか？ 全力で遠慮したいんだけど。

「貴方が私のプロデューサー？」

「うん。違わないよ。俺は下野拓弥（ひろや）、気軽に呼び捨てでもプロデューサーでも好きに呼んでいいよ」

「じゃあヒロちゃんPね！」

「それは勘弁して欲しいかな……」

そう言つて曖昧に笑つた。普通に嫌らしい。好きに呼べつて言ったのはそつちなのに、責任感の欠けたプロデューサーだなあ。

「それで、念の為確認するけど君はフランドール・スカーレットさんで合ってるね？」

「ええ、私があだのフランドール・スカーレットだよ。気軽にフランつて呼んでいいよ」「了解、フランちゃんね」

頷くと、下野Pは手元の書類に目を落とした。

事前に私が提出した履歴書だろう。いつも学校の課題とかはチョチョイと済ませてしまふけれど、今回は時間を掛けて真面目に書いた。ので不足は無いと思う。

下野Pは躊躇うように書類と私の顔を2回くらい見比べると。

「……早速だけどフランちゃん、2つほど聞きたいことがあるんだけど良いかな？」

「いいよー。何が気になるの？」

「まず1つ。——495歳って、なに？」

あー、確かにそれは触れざるを得ないよね。

勿論私はピッチピチの何処に出しても恥ずかしくない10才だ。でもアイドルをやる以上キャラ、即ち個性というものが緊要なのだ。そこで幻想郷のフランを踏襲してはどうかなあ？と思つたのである。

「うん、本当はフランは10才だよ」

「だよなー。今度からは真面目に書いてね？」

「でもアイドルってキャラ付けが大事なんでしょう？495歳のロリアアイドルってなったら話題性凄そうだなあって思ったの！」

「495歳のロリアアイドルって……いや、でもアリなのか……？」

下野Pは神妙な顔持ちで手を顎に当てる。私的には元キャラ的にもベストな提案だと思っただけだね。

数秒くらい待つと「うーん、まあこの件はもう少し検討させて欲しいかな」と煮え切らない返事。まあしようがないか。

「じゃあ次。フランちゃんってもしかして姉妹だったりしない？」

「うん！お姉様はレミリア・スカーレットって言うの！」

「やっぱりかあ……」

瞬間苦虫を噛み潰したような表情をするが、すぐに取り繕った。しかし声は抑えられなかったみたいで、ファミリィネームくらい聞いとけよ武内さん、と下野Pは恨めしげに呟く。

「お姉様と別の事務所に所属してたら何かあるの？」

「まあ基本的に問題は無いんだけど、ただある程度有名になってきたらファンからその

辺突っ込まれるかもしれないね」

「フアンから?」

「うん。例えば「姉妹ユニットにしろ」とかね。だけど現実的には部門違いなら未だしも競合他社の人気アイドルとユニットを組ませるのは至難の業だからね、ま、僕もフアンちゃんも、ついでにレミリアさんもちよつと困るかなあつて程度のことだけだ」

「大変なんだねアイドルつて」

「フランちゃん? 他人事じゃないぞ?」

そうだった。これからは私もアイドルなんだもんね。

……お姉様とユニットねえ。アイツ妙にどんくさいからちよつと嫌なんだけどな。

こけてもたついた拍子に私の事をステージ袖から落としてきそうだし。

「取りあえず、最初に契約書の方を書いてもらいたいんだけど……ご両親は?」

「今はいいわ」

「あー。うーん。倫理的に未成年のみで契約書にサインさせるのはなあ」

「私は構わないよ?」

「そうしたいのは山々だけどね、後々リークされたらウチの会社が問題になつちやうから」

「驚くほど正直に言うのね。しょうがないわ、保証人を呼んであげる」

スマートフォンを出してプロデューサーにメッセージアプリで『暇なら今すぐ346  
プロ本社27階の2711小会議室に来て』と送る。プロデューサーは仕事上報連相に  
関してはマメだからすぐ返信も来るだろう。

「ん、忙しいからこれで来るかは分からないけど。来るにしても少し時間掛かるわ」

「そっか。もし来れられないようなら契約は後日にして、先に宣材を撮ろうか」

「洗剤なんて持ってないわ」

「ベタか。宣伝材料用写真だよ。これを使ってお客さんにフランちゃんの魅力売り込  
むのさ。いよいよアイドルへの第一歩って感じがしない？」

「写真撮るだけでしょ？別に無いよ？」

「まあそうだけどき……何か年齢と反してドライだね君。ともかくメイクさんに化粧し  
てもらいに行こうか」

準備は既に整っていたみたい。

私は下野Pに連れられてメイクさんが待機している部屋に到着すると、時間を掛けて  
化粧をさせられる。

プロ意識が強いのか、職人肌なのか。一言も喋らずに終わると再び下野Pに率いられ  
て別の部屋へと着いた。道中スマホを確認すると「ちよつと良く分からないけど了解」  
と返信があるのを確認。多忙の中でも来てくれるみたいだった。

下野Pはコホン、と一息吐くと。

他人を安心させようとしたのが空回りして胡散臭くなってしまったような笑顔で靴を鳴らした。

「じゃあこれから宣材を撮るんだけど、僕は残念ながら写真に関しては門外漢だね。と言う訳でフランちゃんにはプロのカメラマンに従ってもらうことになるけど大丈夫？」

「勿論、フランちゃんに任せなさい！」

「……それって何かの真似？」

「知らないの？日曜朝にやってたアニメの真似」

「因みにタイトルとかは？」

「知らない。だって私も一回しか見たことないし、お姉様は好きだけだね」

「…… フランちゃんて不思議な子だね、と言う下野Pの発言を笑顔で無視したのは誰にも咎められないだろう。思春期の女の子を扱うのだからもうちよつと繊細な心を感じ取ってほしいまである。」

—————



写真自体は思ったよりも難航することも無く、流水が上から下に流れるように順調に終える事が出来た。フランちゃんは今来モデルの才能もあるよ、とはカメラマンの弁だった。なるほど、そういうキャリアもありと言えばアリかもしれない。まあ今からそんな転身を考える必要もないけどね。

それよりも。

「あの、フランがアイドルって本当なんですか？」

「はいそうです」

「何でこんな事に……申し遅れました、私南武臣（みなみただけおみ）と申します」

「ご丁寧ありがとうございます。私は下野拓弥と申します、この度フランさんの担当プロデューサーをさせて頂くことになった者です」

「そうですか。突然で申し訳ないですが、少しフランと話をさせてもらっても構わないでしょうか？」

プロデューサーは至って冷静に下野Pと会話している……ように見える。

だけど私は知っている。右手が忙しくなく、ポケットに突っ込んだり左手で握ったりしている時、とても動揺していることを。

「構いませんけども……………」

「じゃあ少し失礼して」

ちよんちよんとプロデューサーが廊下の外を指差したので、私はトコトコと歩く。

武臣とはお姉様のプロデューサーであり、我が家の保証人である。

日本男児を体現したような意志の強い顔立ちをしていて、実際決断力はかなりのものだ。私たちの保証人を請け負うのも即決だったし、そこそこ頼りになる。

……………のだが。

「フラン!?何で僕に相談しなかったの!?アイドルプロデューサーといえば僕!僕といえどばアイドルプロデューサー!お分かり!?」

「うい」

「うい、じゃないよフランちゃん!?僕なら絶対にレミリアちゃん並みにトップレベルのアイドルにする自信があるのに何でさ!?信じられなかったかい!?頼りないかい!?ただ僕は頼られたい!!」

……………超めんどくさい。

お姉様がキツめの発狂を覚悟しとけと言っていた意味が漸く分かった。うん、これは確かにキツイ。大の大人がする云為じゃない。

プロデューサーは突発的な事柄に弱い。それは日常生活に多大な影響を及ぼすほど

で、例えば料理中に必要な食材が無かったら焦って手元のを逡巡もせず入れるレベルに柔軟性が無い。お姉様によれば仕事中はそういうのは無いんだけど、何故かプライベートとなるとその悪癖が前面に出てしまうみたいで。

「でもしようがないじゃん。私だって最初はなる気なかったし、プロデューサーも私のこと勧誘しなかったじゃん」

「だって未だ10歳だよ!?!早いって!こんなの良い匂いに我慢できずに一分でカップラーメンの蓋を開けちやうようなもんだよ!陰謀渦巻く芸能界に入るならもっと大きくなってからじゃないと!」

「でもお姉様は12歳の時に入ったよ?私は別扱い?」

「そ、そそそれはフランちゃん関係ないよ!」

「へー」

冷たい目でじつと見ていると騒いでいるのに気になったのか下野Pも部屋から出てきた。私と同じく面倒くさそうな顔をしている。

「すみません。周囲の迷惑になるので大声は控えて頂けないでしょうか」

「……………(めんなさい)」

不機嫌そうな下野Pにシユンと大人しくなった。うん。持つべくは担当プロデューサーだね。

「それで、如何でしょう。了承して頂けるでしょうか？」

「う~~~~~ん」

後に下野Pは「あれほど悩んでいる人間を見たのは国立西洋美術館で悩む人の銅像を見たきりだよ」と称する。

盛大に悩んで、頭をボリボリと掻き毟って、首を何度も振ると。

「……………分かりました。僕は認めましょう。ただフランちゃん、本当にアイドルになるんだね？」

視線がぶつかる。その双眸は至って冷静沈着としていて、本気で私の覚悟を問おうとしている。

アイドルっていうのは非常に厳しい世界だとは私も聞き及んでいる。一つのスキヤンダルで直ぐに干されてしまうし、同業者同士の仕事の奪い合いも苛烈極まっている。私生活も窮屈になる、お姉様の姿を見れば一目瞭然だ。スクープを狙う三流記者を考えれば常に品行方正を求められるだろう。

だからプロデューサーは問いかける。

お前は本当にアイドルになる、その意味を理解しているのかと。

——まあ、そんなの愚問だけどね。

「うん。なるわ。お姉様なんか軽く超えてトップアイドルになっちゃうんだから」

「そっか、なら良いんだ。飽きて辞める……なんてのは無しだからな」

「その時は下野Pが責任を取るから大丈夫よ」

「俺!?!いやまあ、そうならないよう努力するさ」

斯くして、フランドール・スカーレットはアイドルになったのである。

## プロデューサーは酒を飲み語る

その翌日。トレーニングルームにて。

下野拓弥は自分がこれから担当するアイドルであるフランドール・スカーレットの初レッスンの様子を見に来ていた。

今行われているのは現段階でどれくらい動けるかという体力テストだ。アイドルはライブの際に歌ったり踊ったりと身体を大きく動かすから多大な体力を消耗する。その為、アイドルというのは世間が思っているよりもよっぽどアスリートなのである。

まあ目の前で一心不乱に踊るアイドルは流石にまだまだまだひよっ子のようなだったが。本人も普段から積極的に外出していかないかと認めてることだし。

フランがふらふら……ぱたん、と倒れるのを見て、まあインドア派っぽいし最初はそんなもんだよね、と下野はこれからの事に思いを馳せた。

下野にとつてフランが初めて担当するアイドルだった。

当初モデル部門を担当していた下野はアイドル部門へ部署異動になると辞令を渡された時も特に悲壮感はなく淡々と自分の机を片付けた。と言っても内心ではそこそこ不安感もあったりもしたがプロデューサー業は同僚に隙を見せたら負けだ。老舗大企

業である346プロというステージでの出世競争は苛烈にして凄まじい。出世欲なんて大して無かったとしても勤めている以上否が応でもその争いには巻き込まれてしまう。一度油断すれば仕事を取られ、今まで築いてきた地位が崩れてしまうのだ。出世に興味ないと言っても野心たつぷりの同輩に足元を奪われるのはとても面白くない。だから表面上は取り繕わなくてはならなかった。

そういう意味ではこの異動は悪い話でもなかったのかもしれない。新設されたばかりのアイドル部門は世間のアイドルブームに乗ったと言え会社としては未だ進退が予想付かない部門であり、0から開拓していく以上出世云々とかそれ以前の状態だった。全くの更地である。そんな不安定な地盤だからか出世を夢見る人間は部門の崩壊を恐れ殆ど来ず、同僚にもバイタリティーは溢れていても比較的穏やかな人間が集まったのである。

とは言え。下野にとって経験したことがないアイドル業。暗中模索だなあ、と思いつながらも正式に移るまでは他プロダクションのアイドルの情報を探つて過ごした。移動した後は346プロでプロデューサー業についての研修を受け、まあモデルもアイドルも人を商品にしている以上似たようなもんでしょ、と無理矢理ポジティブに気分を持つて行っていた所でタイミング良く武内にフランを紹介されたのだが。

(やっば実際にアイドルを受け持つのは、全く違うね。責任感が重いつたらありやしな

い)

ついに本格的に始まってしまったのか346プロのアイドル事業部。憂鬱だ。下野は密かに目を伏せてこっそり溜息を一回。サボり癖がある訳じゃないが自ら未知の分野に裸一貫飛び込む趣味もない。

これが終わったら一服してやるとばかりに下野はへばったフランを見定める。

「フランさんはやはり有望ですね」

「うわ?!……って武内さん? 何でここに?」

「スカウトした以上、責任を持って経過を知るべきと思ったので」

「ずんぐりとした身体に若干引きつつ、下野は武内を見た。」

武内はこのアイドル部門でもかなり高い位置にいる男だ。ついでに下野からすれば先輩社員に当たる。一応地位的には平社員のプロデューサーであるはずなのだが、噂では大規模なアイドルプロジェクトを企画しているらしい。本当に平社員なのか下野としてもこの短い期間で疑問点は幾つも出来ていたが如何せん、真面目に真面目を掛け合わせたみたいな仕事男だしその話も不思議ではないね、と心の内で思いつつ下野は徐に手帳を開いた。

「有望って……。それ、これを見て分かるもんですか?」

「はい」



武内は間を置かず肯定した。

「フランさんの目を見て下さい。確かにフランさんの体力は同年代と比較するとあまり多くはありません。しかし、あんなにも疲れ果てても尚、瞳が輝いています。まだ十歳の子だというのに、意志は非常に固い。彼女は逸材ですよ」

「でも、ならどうして俺なんでしょうか？まだ少ないとはいえ他にもプロデューサーはいます。それに俺はアイドルプロデューサーに関してはまだ毛が生えた程度のド素人ですよ？」

「貴方なら彼女を引き出してくれる、私がそう確信したからです」

その言葉に首を傾げる。

フランの魅力を引き出す？それ、アイドルプロデューサーとしてのイロハを座学で習っただけの人間が出来るの？

昨日会ったばかりにもかかわらず下野は既に確信を深めていた。

フランはかなり癖の強い少女だ。自分から高齢ロリアイドルとかいう新ジャンルを提案してくるのもそうだが一番はその幼い容姿とは反面に妙に理知的な内面である。

初めて喋った時、冷徹に自分の事を分析しきっている、下野はそう感じた。解れた個所を縫合し直したかのように年齢相応な明るい少女の表情を覗かせたかと思えば、唐突に突いて出る不釣り合いなまでに沈着とした言葉はそのゴシックドレスをふわりと

纏った可憐な容姿と相まってまるで西洋の貴族みたいな貫禄すらある。

少なくとも新人プロデューサーが手綱を握れるアイドルではない、と下野は言おうとして「ボーカルレッツンに移るみたいですよ」と諫めるような武内の言葉が挟まり「……そうみたいです」と渋々話の矛を取めた。

ボーカルレッツンはトレーニンングルームではなくレッツンルームにて行われる。

ベテラントレーナーに案内されるフランの少し後ろを二人して歩き、レッツンルームに入るとベテラントレーナーである青木聖はその妹の青木明に引き渡すとレッツンルームから出て行こうとした。

出る直前に下野は慌てて呼び止めようと声を掛ける。指導者の視点から見解を聞きたい。

「唐突にすみません、フランドル・スカーレットのプロデューサーをしています下野と申します。フランはどうでしょうか？」

「プロデューサーの下野さんですか。私は青木聖です、先程のトレーナールームの管理及びアイドルのダンスレッツンの指導をやっています。さて、スカーレットさんのことですね」

言つて少し悩まし気な顔をしたが、直ぐに元の表情に戻る。

「初日と言う事を考えれば悪くないと思います。体力は同年代と比べても無い方でしょ

う、ですが根性は座っています。ダンスも初心者とのことなので、これから学んでいけば半年くらいでかなり踊れるようになると思います」

「そうですか。ありがとうございます」

「いえ。礼には及びません」

言い放つと今度こそレッスルームからベテラントレーナーは姿を消した。トレーニングルームへと戻ったのだろう。

「武内さん、青木さんも貴方と同じようなことを言っていましたね」

「それくらいフランさんは将来有望ということですよ」

——そんなもんですか。

——そんなもんです。

武内と下野が仲良く示し合ったように言葉を交わしている間にも、フランとトレーナーは自己紹介を終えていた。

「ボーカルレッスンって何をすればいいの？」

「最初ですからね。どれくらい歌えるかを見ましよう。選曲は歌えるものなら何でも良いですよ！」

トレーナーは少しニヤリとしながら告げる。

まあつまりアカペラだった。下野はなるほど小さく呟く。

無伴奏で歌うというのはその実非常に難しい。リズム、音程、キーなどを把握しながら抑揚を付けて歌う技術は素人では困難極まりない。多少何れかがズレただけでも第三者からすればすぐに分かってしまう。なのでこれまで芸能とは無縁の女子小学生だったフランに完璧は求められていない。トレーナーも本当に現時点でどの程度歌えるかの基点を探るつもりだろう。

「ん〜と。……じゃあさ、ここににいる人が解らない曲でも良いの？」

「問題ありません」

「分かった！」

解らない曲……。よつぽどニツチなインディーズの曲なのか、それなら小学生にしては相当音楽通だ。

いや、だが違う。違う気がする。確信は無いが下野は頭の中で無根拠に断じた。

これまでのフランの不思議な雰囲気。加えてフラン自体に邦楽だの洋楽だのを聴き漁ってそんなイメージが無い。まああったらあったで追々それもアイドルとしての強みになるから悪い事じゃないし、この予想は別に外れて良いのだが。

フランは目を閉じると、直ぐに目を見開いて息を吸った。その何気ない動作に下野も武内も言葉を忘れて黙り込む。

凜とした歌声がレッスナルームに響く。その声は幼さと大人っぽさが同時に介在し

ているような情調を孕んでいて、空気を静かに揺るがす。抑揚や掠り声、音程、息遣い、声の盛衰。全てが細い糸となつて組み合わさり紡がれ、繊細に出来上がっている。

プロでも難しいほどに、完璧。歌唱技術について詳しくない下野にもこれがどの程度のものかは解らなくても、少なくとも素人に出来るものではないと理解できる。

そしてこの曲

知らない。その独特なリズムも、歌詞も、下野は聞いたことなかった。隣の武内に視線を送ると、それに気付いた武内は首を横に一回振った。人並みより少し詳しい自分ならともかく、長年芸能界と接してその分野にも造形の深い武内が知らないというのは相当だ。この分だとトレーナーも知らないだろう。

エキゾチックな歌だと思った。

伴奏が無いのに、歌声だけで不思議と異空間を夢想させる。なされるがまま下野は瞳を閉じてみた。

赤い、いや紅い。どこまでも紅い西洋の城。夜でさえ目立つその城の中に囚われの一人の少女は地下室でヌイグルミを壊す。壊して、また壊して、自己嫌悪に浸る。窓があつたらどんなに良かっただろう、今宵の月は何のような欠け方をしているのだろう。しかし確認する術は無い。地下室に窓など有りはせず、少女は己の感情が滾るのを待つばかりなのだから。

歌い終わるとフランは舞踏会で一曲踊り終えた令嬢のように優雅に一礼して、無邪気に口を開いた。

「ねえねえどうだった？一応歌には自信あるんだけど」

「……これはこれは。既に技術に関して私が教えられることは無いですね。どこかで歌を習ったりしました？」

「ううん？偶に家で歌ってたくらいかしら」

「なるほど……ただ肺活量が少ないみたいですね。後は声の深みが足りないのと、ビブラートの振れ幅がちよつと浅いのと、音程のメリハリを若干曖昧に誤魔化している箇所があります。私が鍛えられるのはそこくらいでしょうか」

「滅茶苦茶あるじゃん！」

フランは少しガツカリした面持ちで項垂れた。

いや、でも。

トレーナーはそう言うが、どう考えてもこれは。

「……凄まじいですね、彼女」

武内のそんな呟きには下野も心底同意だった。

「ええ、全くですよ。武内さんこんな大物何処で見つけたんですか」

「都内のコンビニです」

「ええっ」

意外過ぎる。

まるでお姫様みたいな容姿に普段着でドレスを着込んだ少女とコンビニでエンカウ  
ントつてどんなラックしてるんだ、とか、武内さんはもうスカウト業に専念した方が活  
躍できるのでは、とか思ってしまった下野だったがともかく。

言葉を飲み込んでると武内はボソリと呟く。

「……ですが、正直ここまでの才覚があるとは思いませんでした。フランさんは既に  
ボーカルだけならAランクアイドルにも通じます」

下野はその武内の漏れてしまうように出てきた単語に言葉なく驚く。

アイドルランクというものがある。アイドルの人気を簡易的に表したもので、Fから  
始まり最高がSランクである。Aランクともなれば国内でも有数のアイドルが名前を  
連ねていて、765プロの天海春香、526プロのレミリア・スカーレットなどが挙げ  
られる。そんな中346プロには未だAランクアイドルは在籍しておらず、最高は今武  
内が担当しているアイドルグループのCランクだ。このグループ現在活動一年目、他の  
プロからヘッドハンティングしてきた為にこのアイドルランクを誇っている。純粋に  
346プロでキャリアを始めたアイドルは全員Fランクどころか、それ以前にそもそも  
デビューもしていない。フランだってデビューは数ヶ月先の話だ。まだ新人オーデイ

シヨンを終えて結果を各応募者に郵送したばかりである。例え一番早い合格者でもレッスンに入れるのは一週間後になるだろう、と下野は考えていた。

ともかくだ。

Aランクという言葉は重い。そこに振り分けられているアイドル全員が日本を席卷するアイドルの一人なのだ。武内だってそれを分かった上で言ってる。

つまりは。

フランドール・スカーレットという少女は、アイドルとして天禀の才を持っているのだろう。それをしっかり支えることは出来るのだろうか、プロデューサーとして然るべきことを成せるだろうか。下野は再び歌い始めたフランを視野の外に放り投げ心中で反芻し始める。

——— 思考に耽る下野といつもの強面で眺める武内は背後で、入り口からただただ中を覗く男についぞ気付くことはなかった。

—————



フランのレッスン後、メールを受け取った下野は待ち合わせ場所の駅に向かっていた。

足取りは重い。フランはダイヤモンドの原石のように輝いていた、稀に見る逸材だ。それを上手く削り、一級品とする役目を背負うのがプロデューサー。業界は似通っているが以前やっていたモデル相手とは全く違う、下野は鬱屈とした気分をミントガムを噛み締めて誤魔化す。タバコを吸う時間が無くて妥協的にコンビニで買ったものだったが悪くはない。

一度駅の化粧室に入り、お気に入りのネクタイを整えスーツを正していると懐に入ったスマートフォンがブルブルと2回震える。待ち合わせ相手が先に着いたのだろう、そう思っ手洗うと直ぐにそこを離れた。

「お待たせしました」

「いえ、僕も今来たばかりですので」

駅構内にある時計台の長針は午後7時を示していた。もう夜の帳も降り切っている。時計台の下、下野と同じくスーツをきつちりと着込んで立っていた男——南武臣はビジネススマイルで下野を先導する。

「近くで居酒屋を予約しているんですよ、そこで話しましょう」

「用意が良いですね」

「僕も貴方と同業ですから」

南は昨日、フランの裏でこっそり下野と名刺を交換していた。このサシの飲み会も南が下野を誘ったものだ。

5分程度歩くと「ここです」と南は徐に落ち着いた雰囲気の居酒屋に入った。下野も着いていく。

個室に案内され、互いに生ビールを片手に取ると。

「じゃあ乾杯」

「乾杯」

一口含んで、苦い。アルコール臭が脳を微かに劈く。

下野はアルコールが苦手だった。アルコールは思考を邪魔する。眠気も誘発する。何より健康的じゃない飲料だ。飲めないわけじゃないが、普段から飲み会では様子を見て烏龍茶を頼むくらいには酒は避けている。

最初の一杯だけ付き合ったからもう充分でしょ、とばかりに下野がお通しを摘んでいると南が口を開く。

「僕、実はプロデューサーには嫌々なつたんですよ」

「……そうなんですか？」

「ええ。今のプロダクションに入る前は346に居たんですけどね、そこも就職難で仕

方なく入った会社でした」

お恥ずかしい、と目を伏せて言う南に下野は驚かざるを得なかった。

346プロにいたということもそうだが、何より南が嫌々とこの業界に入った。それが信じられない。そもそも346プロは老舗大企業、妥協で入れる会社じゃない。ここは誰もが第一志望に名を挙げ、懸命な努力の末で入社 of 叶う場所だ。下野だって厳しい入社競争の末に漸く掴んだ切符だった。

訝しんでるのを察したのだろう、南はジョッキを呷った。

「僕、世間的にはかなり良い大学に行ってたんですよ。それで就活してた当初は官僚を目指してたんですね……まあ落ちちゃいましたけど」

「……その後346に応募したんですか」

「ええ。応募自体は公務員試験より全然前でしたけど、何とか苦勞して民間の就活とを両立してたのが功を奏しました。当時は絶望一色でしたけどね」

南は朗らかに笑った。

「でも馬鹿なことに業種問わず一流企業だけ受けてたんですよその時の僕。同期がみんな大手に就職していくので僕もプライドがあつたんですね。今思えば無計画で失笑ものですよ。それで民間も殆ど落ちたんです、当たり前ですね。その何とか受かった一社が美城プロだったんです」

「なるほど……」

自慢に聞こえて、そこはかたなくイラツとは来たが下野は抑える。

「そうして乗った船で、芸能界について何も分からないのに僕はプロデューサーになったんです」

「……不安とか無かったんですか?」

「正直の身着のまままでエベレストに登頂しろと言われた気分でした。まあそれは下野さんも同じでしょ?」

「俺ですか?」

「最近のアイドル部門新設でアイドルプロデューサーになったんですね。分かりますよその気持ち」

「いえ、南さんよりは全然です」

事実南よりはまだマシな状況だった。

下野には部門違いとは言えプロデューサーとしての経験がある。アイドル業界に寡聞ただけで、普段の仕事自体はそう大きく変わることはない。

だがアルコールを含んだ唾を盛大に飛ばしながら南は大声で机を叩く。

「それでもですよ! 違う分野に飛び込む恐怖は得てして在るものです! 僕だって今でこそ何とかレミリアを育て上げたけど栄枯盛衰の激しい業界である以上未だふとした時

に感じるんですよ!」

「あの……。酔ってませんか？」

「今そんなのどうでもいいでしょうが!!」

あ、完全に酔ってますねこれは。

下野は面倒臭くなってきた状況にため息を吐いた。どうやら相当酒に弱いらしい。

「大事なのは下野さんがウチのフランを担当するということなんですよ」

「ウチのって。いやまあ、そうですが」

「否定できないでしょ!? そりゃそうですよね! 武内の野郎鳶のようにウチのフランを掻っ攫いやがって……!」

荒れる南はさておき、どうにも武内を知っているようだった。346プロにいたとも言っていたので不思議じゃない、ないのだが。

「もしかして武内さんと元同期だったりしますか?」

「ハイエナ鉄面極道野郎と同期!? ああそうですよ! 一緒の年で入社しちゃいましたよこことらー!」

「なるほど」

ハイエナ鉄面極道野郎……。

相当なヘイトを買ってるけど大丈夫だろうか武内さんは、なんて考えつつ会話が噛み

合わなさから無意識にビールを一口飲んで、顔を顰める。放課後に忘れ物を取りに教室に戻って見たら初恋相手が嫌いな男子とキスしているシーンを見てしまったくらいには苦い。苦かった。

「フランはあと数年したら526プロでアイドルデビューするはずだったんですよ!? それでレミリアと姉妹でスカーレット☆シスターズってユニットで鮮烈アイドルデビュー! トントン拍子でSSSランクアイドルになるはずだったんですよ!」

SランクアイドルならともかくSSSランクってなんだろうか。昨今の異世界なろう小説じゃないんだからもうちよつと節度を考えるべきではないだろうか。

下野はビールをまたぐびつと直接食道に流し込むように飲むと。

「知らないってそんなのさ! それにスカーレット☆シスターズって何そのクソダサユニットネーム! 捻りが1mmも無いじゃんか!」

「国民的アイドルなら時には直球も必要です! 正統派アイドルユニットとしてこれ以上の最適ユニット名は無いのは自明の理! これが理解できないとはアイドル業に関わり始めて浅いだけはあるな!」

「たしかに僕はアイドルプロデューサー初心者だ、うん、認めよう。分かんないさ」

「……あつさり認めるんですね」

「そりやまあ、先達に経験で勝てないし」

矛をあつさり抑える下野に面を食らった南は、何となく負けた気分になって更にビールをゴクゴクと喉に流し込んだ。そこら辺の未成年飲酒してる高校生よりも酒弱い癖に一気に飲み干す。

止める間もなくジョッキを開けると「スイマセン！生追加で！」と店員に注文する。

これ、放置しちゃっていいのだろうか？まあ面倒臭いしいつか。と下野は乾いた塩キヤベツを口に運ぶ。

南は半分も減つてない自分のジョッキを片手にビールの泡に口を付ける。

「調子狂いますね、本当なら今頃フランの担当Pになれなかつた恨み辛み時々私怨を下野さんにぶつけてたんですけど」

「ぶつけないでもらえませんか？」

「ともかくです！下野さんには一流のプロデューサーになつてもらわなければ困るんですよ！フランを超高校級のアイドルにしてもらわなければ困るんですよ！」

「まだ小学生ですけどね」

顔を赤くして、ふいふ、と息を吐いた。

「フランが一線級のアイドルになる素質を持った少女なのは下野さんも分かりますよね？」

「ええ、それは」

「下野さんが嫌いなわけじゃないんですけど本当なら僕がプロデューサーしたいんですけどフランは！2年間家で見てきました！武内さえいなかったら僕がアイドルにしてましたよフランが望めばだけど！」

「まあ、心中お察ししますけど」

「だからこそ困る！フランを絶対にトップアイドルにして全国、いや全世界に夢を与える蝶にしてもらわなければ困るんです！」

「全世界はちよつと……………」

「分かりますか下野さん！僕は個人的に、526プロとか346プロとか関係なく、下野さんを手伝おうと思ってるんですよ！」

「…………本気ですか？」

「思わず唐揚げを食べる手を止める。」

それは企業的に大丈夫だろうか。346プロと526プロは言わずもがな同種企業、競合しているのだ。それを分かかっていてなお346プロに所属する下野とそのアイドルに協力することは背信行為に当たる。

「本気も本気です！ヒック。信じられませんか!?!分かりました！なら今からこのビール一気飲みしてやりますよ！」

「それは止めてください！酒弱いんでしょ！」



「ええ！弱いですよ！でもそれ以上にレミリアとフランに弱いですよ僕は！」  
「知りませんよ！」

「ともかく下野さんとは個人的な関係なので何の問題も無いです！無いっただけ！別に僕だって仕事を流したり直接接触してあれこれしたりと明らかかなことはするつもりです！ただちよつとアドバイスとかノウハウレクチャーするくらいしかやりませんよ！」

「いやそれ十分接触するのでは」

「大丈夫ですって！大丈夫じゃなくてもどうにかした後はどうにかします！」

「それ完全に無謀無策！」

「ともかく僕にとつては家族みたいなもんなんです！なので重々頼みますよフランさん！」

「俺は下野ですが！」

酔っぱらいの絡みに早くもダウンしかけている下野。

南の助力の申し出はありがたい。色々と危ういところはあるので素直に領けないところではあるが、それでもアイドル業界に詳しい南の力を得れるのは大きい。幾ら老舗の大企業とは言え新設なので346プロには経験豊富なアイドルプロデューサーがおらず、南のような人気アイドルを抱えたプロデューサーの知識は大変貴重なのだ。

——しかしフランの為だけにここまでやるとは………。

南武臣という男は縛られない人間なのかもしれない。変わり者なのは確かだろう。情熱的なのも確かだろう。そう、だからこそプロデューサーとして。担当アイドルであるレミリア・スカーレットをたった三年で大成させるといった現実的に難しいことが出来たのだろう。

そんな男がフランを託してきた意味が分からないほど下野も暗愚ではない。

——自分を信頼したのだ。会って二度目の、アイドルプロデューサーとしては何の実績もない自分を。

下野は酒に酔っぱらった南に適當に相槌を打ちながら、今夜は遅くなりそうだと烏龍茶を注文しようとして。

ブルルルルと下野の懐からバイブレーションが震えた。

仕事終わりの際はメールやメッセージなどの通知は通知音のみでバイブレーションは設定していない。つまり必然的に電話着信である。

ちよつと失礼します、と酔っ払いを無視して下野が席を立ち、開けた場所で電話を取る。

——通話を終えた下野は、先程まで飲んでいたのが嘘のような険しい顔になっていた。

不安は消えないが、託されてしまった以上やるしかない。下野は緩んでいたネクタイをキツく縛った。

## アイドル見習い二人娘

アイドルって何をやるんだろうなあ、と。

アイドルになった私が初日に考えたことがそれだった。

初っ端からライブとかCMとか、ましてや番組とかそういう仕事貰えるはずもない。私はアイドルはアイドルでも超駆け出しなのである。だけど無意識でアイドルって単語に絢爛なイメージを結び付け過ぎていたのかもしれない。

んで。

一週間経過した私からすればその答えは容易に出せるようになっていた。

—— レッスンレッスンレッスン、もっかいレッスン！

とにかく練習塗れなのだ。年齢以上には胆力があると自負している私でも引いちゃうくらいには。なんだろう、想像以上に地道だった。

そんな私の一日は朝起きてランニングを行うことから始まる。トレーナーから「お前は体力がとにかく足りない」と言われた私は家でも出来る体力トレーニングとして朝ランニングを始めたのだった。正直めっちゃ辛いけど大事なのは臥薪嘗胆の心である。

ランニングを終えると家事をして、レミリアお姉様の愚痴を聞きながら朝食を食べ

る。その後学校に行つて一人で退屈な授業に身を馳せる。放課後になればその足で346プロのビルに行つてレッスン!……何だかレッスンって言葉を思い浮かべるだけで憂鬱になつてきちゃつた。

まあこんな日々がこれからも永遠と続くと思うと気が滅入る話ではあるけどそこは老舗大企業の346プロ、人のやる気を削ぐような世知辛い話だけじゃない。

下野Pによれば、まず今やつてる346プロに所属するアイドルの全体曲を覚えたら個人曲のレッスンを始めるらしい。それもそんな遠い話じゃないようだ。

「にしても歌は捨てていいからまずはスタミナ付けろつて言つてもなあ」

朝ごはんのパンを焼きながら思わずボヤク。

歌音痴なつもりはなかつたんだけどやつぱりプロからすればお粗末なものだつたんだらうなあ。自信あつたんだけどなあ。落ち込む。

ともあれ、スタミナである。今必要なのはスタミナなのだ。

「やつぱタンパク質豊富なものとか摂つたほうが良いのかなあ?」

「フランおはよ〜」

眠そうに欠伸をしながら朝ごはんを品定めするお姉様に「おはよ」と返しつつ、昨日言われたことを思い出す。

「今日はこれから九州だつて?」

「ええ、そうよ。1泊2日の地方ロケだから今日は帰れないのよね……偉い偉いしてフラン」

「はいはい偉い偉い」

「うわー我が妹ながら雑」

いや朝からダル絡みされても面倒だしそりやそうなるよ。

……そう言えばこの姉も腐ってもアイドルだ。食生活の秘訣とかもしかしたら知ってるかもしれない。

「お姉様。アイドルになってから何食べてるの？」

「藪から棒にどうしたのよ？」

「いや私、アイドルになったけど体力が全然無いじゃん。だから食生活とか抜本的に見直す必要あるのかなあって」

「必要ないわよフラン。私だって最初はそうだったもの。大事なのは日々のトレーニングだよ」

食パンを片手にワイングラスを傾けるお姉様に徐々に一日の長を感じる……！ワイングラスの中身ただの水水道水だけだ。

確かにお姉様のご飯を作ってるのは私だ。今でこそ多忙に連れてその頻度は少なくなってきたけど、それでもこの2年間ずっと作り続けている。

「なぐる。じゃあ尚更トレーニングサボれないね」

「まあ頑張りなさいな。その頃は私も大変だったわ」

天蓋を貫いて燦々と射し込む陽の光が部屋を明るく照らす。

今日は一日通して晴れようだ。

—————

私は音に合わせてステップを踏んでいた。

想像するのは湖畔に立つ白鷺。優雅に、それでいて流麗で淀みない川のせせらぎみたいに身を溶かす。どれだけ踏んでも舞っても水面は揺れずに月を投影している。

ぱちやり。

一步、ステップを間違えると飛沫が舞う。月影は儂く揺ぎ、僅かに私は湖に沈んだ。

ぱちやりぱちやり。

栓が抜けたように私は間違えを続ける。既に足元は見えず、膝上まで水に浸かった。

否、沈んでしまったのだ私の身体は。

蜘蛛の巣に引っ掛かってしまったモンシロチョウみたいな憐れに抵抗を続けるが、すればするほど水飛沫はバシヤバシヤと上がり続け、身体はズブズブと何者かに湖底から引つ張られているみたいに沈む。水に動きを奪われ身体は思うように働かず、まるで全身が金属製になったみたいな疲労感すらあった。

ついには水面が顎下まで達した私は、それでも最後まで諦めじと踊り踊り――。

「――今日はこれまで。各自クールダウンをするように」

トレーナーの言葉に「ぶはあつ！」と情けない息を吐いて、私はふにやふにやりと倒れ込んだ。

本格的に始まり一週間、私はレッスンに全くついて行けてなかった。

体力が無いのもあるけど、何より身体のキレに精彩が欠けている。運動不足に加えて運動神経まで不足気味とかこれは如何に。

でも隣にいる女の子も私と同じように倒れ伏してバタンキューとなっちゃってるのでもしかしたらこれが普通なのかもしれない。うん、普通。……やっぱり私たち、どっちも体力が無いだけでは？

「ぜえ、ぜえ……！ 幾らかワイイボクのレッスンで張り切ってしまったとは言ってもこれはキツ過ぎますよー！」



「そうかそうか。ならもつと張り切ってしまっても構わないな輿水？」

「カワイイボクの踊っている姿をもつと観たいのならそう言ってくれば——じよじよ冗談ですよ!?! 冗談ですからカセットラジオの再生ボタンを押そうとするのは止めて下さい！」

人差し指をカセットラジオのボタンに当てていたトレーナーは残念そうにその指を退かした。これは冗談を言った方が悪い。私なんてそんな言葉を発する余裕すらないのに、やっぱり彼女の方が体力が多いっぼい。

輿水幸子がこのレッスンに加わって二日目。

どうにも私がスカウトされるちよつと前に346プロでアイドルオーディションがあつたらしくて、つい先日その合否が郵送されたばかりらしい。それで幸子は合格通知を見てすぐに鉄砲玉みたいにここへ来て346プロのアイドルの寮に入ったとのこと。またこれからもレッスン人数は増えていくんだらうね、人が増えるのは良いことである。因みに他にもう一人、既にレッスンに入っている人もいるそうだけどそっちの方は出会ってない。噂では大人、らしい。

まあそれはさておき。

今までは私とトレーナーだけのマンツーマンで地獄みたいな時間だったけど、昨日からスケープゴード……じゃなくて幸子が増えたおかげでトレーナーの指導が分散し

て何とか多少楽出来るようになった。でもキツイのは変わらない。だって根っこが引きこもりだもの。

「フランさん聞いてくださいよ！トレーナーさんが可愛さのあまりボクを虐めてきます！まあ可愛いから仕方ないですけどね！」

「トレーナーどうする？」

「ああ、明日のレッスンはもつと可愛がつてやろう。可愛いから仕方ないよな？」

「うわわわっ！カワイイもの虐め反対！僕には及ばなくてもかなり可愛いフランさんもこちら側についてください！」

「トレーナー、明日は私もコーチ側に回って良い？」

「一週間の長はあるからな、特別だぞ？」

「裏切りましたね!?フランさんの孔明！」

それは捨て台詞なのだろうか……？

諸葛亮孔明。確か劉備とその子に生涯仕え、君主と同じく仁義を重んじた軍師だった……と評されているがその実正史では非人道的なエグい権謀術数も厭わず行つた蜀の大物である。

……なるほど、こんな分かりにくい罵倒をするなんて幸子も酷い女の子だ。食糧不足で兵士のご飯に人肉を混ぜたとされる魏の軍師である程昱よりはマシだけど。さてお

き、幸子は意外にも私と同じで読書家なのかもしれない。

トレーナーは「じゃあ明日も休まず来るように」と学校の先生みたいな事を言う部屋から出て行ってしまおう。去り際に口元が少しニヤリとしていた気がするけど……ま、気のせいかな。

「フランさん酷いですよ!?!ボクを売りましたね!?!」

「私はお金は貰ってないわよ?」

「ものの例えです! 幾らかワイくてもボクを売るのはダメですからね!」

「うーん、……考えとく!」

「満面の笑顔! くうっ! 僕には敵わないですがカワイイ!」

この子の世界はカワイイさを基準にして動いているのかな。

私は床に座って足を前に伸ばす。長座である。

「幸子ー。それより背中押してー」

「それよりって……まあ良いですけど。後でボクにもお願いしますね」  
「うん」

幸子は私の背中を押し始める。レッスン後の柔軟体操なのだ。こういう丁寧な体調管理がアイドルには必要だったりする。特に私とかはあまり運動してこなかったからこまめに身体を労わらないとすぐ何処かおかしくしちゃいそうだしね。

「あの、ちよつと気が抜けすぎじゃありません？ アイドルがそんな返事したらダメですからね？」

「えーっ、面倒臭いの。じゃあ私こういう、怠惰な感じのキャラでアイドルやってこうかなあ」

「ダメですって！ 折角ボクレベルではなくてもカワイイんですからちゃんと自分の魅力を發揮しましょうよ！」

と言われても。

私もあんまり個性ないからなあ。一応下野Pに提案だけはしてみただけど通るとも限らないし、すると私はただの引き籠り気味の女子小学生のフランチちゃんになるのである。うん。幸子の半ばナルシスト染みた個性が羨ましいのだ、まる。

幸子にグイグイと押されること5分、選手交代の時間である。今度は私が押す番だ。

「じゃあ幸子、押すわよ」

「ゆつくり丁寧に、丁寧にですよ！」

「はいはい分かった分かった」

私はゆつくりと手で背中を押ししていく。……アレ、思ったよりも柔らかい。これならもつと行けそうな気がする。更に押す。ついでに胸を背中に当てて身体の全体重を幸子に掛ける。

「……つて痛い痛い痛いですよフランさん!? ボクがカワイくなくなっちゃったらどうするんですか! それって世界の損失ですよ!」

「大丈夫だよ。柔軟で人は死なないから」

「そういう問題じゃないです! もつと優しくして下さい!」

「幸子の背中つて暖かいね。ポカポカしてて日向みたい」

「言葉を優しくされても身体は限界を超えて曲がることはイタタタタタ!」

注文多いなあ幸子は。

望み通りに力を抜くと、ふにゃ〜と気が抜けた声を出した。猫か。

クールダウンを終えると、幸子と一緒に死に体でトレーニングルームを後にする。更

衣室で着替える前に風呂入ろうかな。

「幸子ーお風呂入らない? 今なら貸し切りだよ、多分」

「良いですね! お風呂もボクのカワイイ姿を見たいとばかりに呼んでいます!」

「断じてそれはないと思う」

「ちよつと否定の仕方が強すぎませんか!」

そりゃ幸子だし。会つて二日目だというのに何だか大体幸子の扱い方が分かったかもしれない。

「じゃあお風呂入ったらどうする?」

「ボクは帰りますよ？帰ると言ってもスグそこにある寮ですけど」

「そう言えば幸子って一人暮らしなんだっけ」

「フーン！家事とかも一通りできますよ！」

「えっと……凄いな」

「何ですかその微妙そうな表情!？」

「だって私もそのくらい出来るし……」。

何だったら無駄に大きな自宅を管理してるのもほぼ私だ。ただ、これからはそんな管理人みたいな事をしてた私も忙しくなるし……どうしようか？お姉様に手伝って貰おうにもアイツ何も出来ないし。あーあ、こういう時に有能なメイドが欲しいわ。

「まあいいや。幸子ってじゃあ暇なんだよね？」

「その物言いには納得行かないですけど……まあそうです。こうして一人で過ごしてみても初めて知ったんですが、家に帰っても誰もいないというのはこんなにも寂しいものなんですわ」

幸子はそう言って笑った。

そうだった。良く考えたら幸子、未だ12才じゃん。小学6年生じゃん。なんで一人暮らししてるんだこの子。

「……良かったら私の家泊まる？」

「……カワイイボクを家に招きたいのは分かるんですけど、いいんですか?」

「どうせ私の家も今日誰もいないし、もしいたとしてもお姉様かプロデューサーくらいだわ。そんなの空気よ空気」

「空気って……プロデューサーさんも不憫ですね。まあいいでしょう!ボクがフランスさんの家にカワイイを振りまいてあげますよ!」

「カワイイを振りまくって良い表現だね!まるで火災用スプリンクラーみたい!」

「その例えはカワイくないです!却下です!」

「……と言うか今何となく誤解が発生した気がする。主にプロデューサーってあたりに。まあいつか。」

「ふと思ったんですけどフランさんって何才でしたっけ?」

「設定上仕方なく10才だよ」

「設定?」

「本当は495才なの」

「あからさまに嘘じゃないですか!」

「一応そういう風に売ってくつもりなんだけどなあ、私の中ではだけど。」

「と言うかちよつと待っててくださいよ!?!10才なんですか!?!」

「アレ?言ってなかったっけ?」

「知りませんでしたよ！大人っぽいからってつきり見た目は小さくても年齢は上なのかと！」

「幸子がガキっぽいだけだよ」

「ホント時々口悪いですよね！」

そんなこと無いって。私超良い子だもの。問題とか一回も起こしたことはないし。

「まあここはお姉さんとしてボクは快く許してあげましょう。ふふーん、今この瞬間からフランちゃんと呼んじやいますよ」

「じゃあ私も小林って呼ぶわ」

「違いますよ!?!絶対にやめてくださいいね!?!」

相変わらずオーバーだなあ幸子は。冗談なのに。

窓から仄かに望める星明りに夜を実感しつつ、私は暖簾を潜る。

ここ346プロ別館には様々な福利厚生施設がある。先程までダンスを教わっていた場所であるトレーニングルームやボイストレーニングをする為にあるレッスルーム、更にエステルームや娯楽室まであるのだから驚きだ。今いる浴場もその一つで、346プロの社員なら誰でも使える。でもまあ、男子風呂はともかく女子風呂は恒常的に使ってる人が少ないようで私が行ったときも多くて2人とか3人くらいしかいない。大浴場が嫌なのかもしれない。さておき、つまり穴場ってことなのだ。



「ふわわ！おつきいすね〜！」

幸子は感嘆するように口を大きく開いた。

同時に50人以上は余裕で入るだろう。大きなホテルとかで見ると大浴場のサイズだと思ふ。それでも普段入浴してゐる人数がアレなので、ちよつとこのお風呂が不憫に感じてしまうのである。

既に何度か入っている私は置いてある物に特に迷ふことなく普通に身体を洗い流し、髪を洗う。

にしてもシャンプーやヘアコンディショナーも見て分かるほど高いのが何気無く置いてあるあたり、やはり346プロは老舗大企業だなあと改めて実感してしまう。それともあまり使う人間がないから置いてあるのか……まあ使えるんなら何でもいいけど。

丁寧にリンスを落とすと、ぱちやぱちやと湯船に足を進める。

1分くらいのはほんとしてゐると幸子もやつてきた。

「フランちゃん早くないですか？」

「いつもこんなもんだよ？まあ慣れてるし」

と、不意に目が胸元に行く。

……無い。皆無ではないけど、侘びしさを感ずるくらいには無い。故に幸子の胸は侘

助。

「あのフランちゃん？ボクがカワイくて見惚れるのは分かりますけど何をジッと見ているんですか？」

口を尖らせて追及しようとする幸子はほっといて、ふと少し離れたところで私たちと同じようにお風呂でゆったりしている女の人に私は目が行く。女の人、というか目が行ったのは更にその一部分。野外ライブも斯くやと盛り上がってるその部位。

「……富士山と高尾山、かな」

「失礼過ぎません!？」

あれ、視線の意味に気付いてたんだ。

「ボクだってまだ小学6年生ですよ！成長期は全然これからで、即ちボクは今以上にカワイくなることを確約された宝石なんです！」

「うん、幸子は伸びる伸びる」

「適当!？」

まあ実際この年齢だと成長の個人差もあるし、本当に何とも言えないところではあるけど個人的には控えめのままお淑やかに現状維持してもらいたいよね。そつちのほうが面白そう。

なんて思っていると、さつき幸子との比較対象にしまった女の人と目があつた。

## アイドルとしての試練

「こんばんわ〜」

「こ、こんばんわ……」

話しかけられると思わなかったので、思わず動揺して幸子とハモってしまふ。

女の人はゆつくりと湯船をかき分けながらこちらへと来る。

良く見ればすごい美人さんだった。くすんだ緑色の髪はしっとり水分を含んで垂れ下がっていて、肌は高級な陶磁器みたいに白くて滑らかで。目の下にあるホクロはお湯によつて上気した肌と相まって凄いい色っぽい。アダルテイな魅力っていうのはきつとこういうのを言うんだろう。

観察していると女の人は口を開く。

「貴方たち……新しく出来たアイドル部門の子？」

「は、はい。そうですけど……」

「じゃあもしかして、プロデューサーは下野さんだったりするかしら？」

「ええ。私も……幸子も担当は下野Pだよね？」

「勿論ですよ！カワイイボクをどこまで輝かせられるのかプロデューサーさんのこの先

は楽しみですね!」

「うん? うん」

思ったけどプロデューサーというのは基本何人のアイドルを担当するんだろう。

お姉様の場合は完全にプロデューサー1人だけど、どうにも会社の方針によってイマイチ違うらしいし。武内は少なくとも4人は担当してるしなあ……まあ今度聞いてみようかな。

「それで、貴方は誰なの?」

「ふふふ、自己紹介がまだでした。高垣楓です、今はモデルをしています」

「モデルさんですか。ボクは興水幸子です。世界一カワイイ女子小学生兼世界一カワイイアイドルをやっています!」

「でも駆け出しじゃん」

「これからトップアイドルになるから良いんですよ!」

口ではトップアイドルと言っても実際になれるのは何年後か……でも幸子はバイタリティーあるし案外二年くらいしたら分らないかも。

「そっちの貴方は……?」

「私はただのフラン。フランドール・スカーレットよ」

「幸子ちゃんとフランちゃんね、宜しくお願いします」

そう言ってふつと笑った。おっとりとしながらも何処か掴みどころのない雰囲気を持つた人だなあ。

「ところでプロデューサーさんの事を気にされていたようですけど、お知り合いですか？」

「ふふつ。下野プロデューサーはアイドル部門に移籍する前は私のプロデューサーだったの」

「じゃあプロデューサーさんって前までモデル部門にいたんだ！」

「正直意外です……。プロデューサーさんのことは嫌いでも苦手でもないんですけど、ただちよっぴりプロデューサーって……………」

楓と幸子と私、何となく同じ事を考えている気がする。

「せーのっ、で言わない？」

「なるほど、ボクは良いですよ」

「私も整いました」

「おーけー。じゃあ行くよ。せーのっ！」

「「胡散臭い！」」

満場一致だった。うん、無二無三で下野Pが悪い。

「イエーイ！とお風呂場でハイタッチを交わすと、口々に「プロデューサーさんの笑

顔っていつも飄々としてるんですよね」とか「雰囲気自体がもう信用性ないもん」とか勝手なことを言い始めてみる。ちなみに2つ目が私の発言である、実際そうだし。

楓もそれに乗って口を開く。

「それに下野プロデューサー、当日に突然「異動することになったので楓さんは明日から別の担当プロデューサーに付いてもらいます。大丈夫です、ちゃんと仕事に関しては俺が引き継いでおきましたから」とか言い出すんですよ？酷いですよ……今まで一緒にやってきたじゃないですか……」

「そ、それは……」

……弁護のしようがない。幸子でも下野Pをフォローする言葉が上手く出ないみたいだ。

にしても胡散臭い上に人の心が欠片も分からないのかな下野Pは。もうちよつとこう、それならそれで相応しい態度があるでしょ。

楓は心を決めましたとばかりにキレイな形の胸を張った。

「だから私……近い内にモデルやめようと思います」

——何か初対面で突然凄い発言をブツこまれた気がするんだけど。ちよつと対応に困る……。

「えーっつと、その後どうするの？」

「アイドルになろうかなあと」

「でもそんな簡単にはなれないじゃないんですか？オーディションはこの前終わったばかりですよ」

幸子は少し不思議そうに首を傾げた。

そう言えば幸子は346プロのアイドルオーディションを受けてここにいるんだっただけ。なら初めにそう思うのも無理はないのかも。

楓は青い鳥が飛んでいるのを偶然見かけたみたいにな若干目を見開いて。

「……アイドル部門にはこの話に行っていないんですね。実は今、346プロが別部門に所属しているタレントの中から希望者を募ってアイドルにする動きがあるので、私も乗っちゃおうかなって」

「なるほど」

346プロはまだ殆どアイドルを抱えていないのもあるけど、それ以上に。既に各分野で知名度のあるタレントをアイドルに転向させることで話題沸騰を狙ったものなのかもしれない。

加えて346プロに所属してるタレントなら歌、ビジュアル、ダンス、その少なくともどれか1つは元より断然平均から上のスペックを持つてるはずだし大成する可能性だって率直な話オーディションで素人を引っ張ってくるよりも大分高い気もする。全

部素人の憶測だけだ。

「じゃあ楓は私たちと同じアイドルになるんだね！」

「その時は後輩として……よろしくお願いしますね」

「ボクに任せて下さい！ボクの指導ならすぐに普通以上のカワイイを身に着けられますよー。」

「幸子はプロデューサーじゃないでしょ」

楓はふふつと楽しげに微笑む。

「取り敢えず、まずは下野プロデューサーに苦言を入れなきゃいけませんね……」

「じゃあ今から行く？」

「それは……心の準備がちょっと」

「楓さん！今行かないとずっと行かないままになっちゃいますよ？」

幸子は楓の手を握りながら、「行くなら今しかありませんよ？チャンスは意外に無いものなんです。自分から行動しよう！と決心する機会なんてあまり多いもんじゃないですよ？まあカワイイボクは別ですけど」

「一言多いよ小林」

「幸子です！って間違えました!?これ余計に駄目な感じになっちゃってるんですけど!?!」



最後の置き言葉はまあ良いとして、言ってることはその通りだった。本当に幸子かお前。こんのくという感じで新雪が積もったような頬を引つ張ると「やめえてくでやしやい」と舌足らずな子どもみたいに私の頬を握り返してきた。力は調整してくれているみたいで全く痛くないけど。

楓はお湯をパシヤンと顔に掛けると、徐に立ち上がった。

「……心の整理ができました。私一人では無理ですが……お二人と一緒に立ち向かえそうです」

「その意気です楓さん！プロデューサーさんに一泡吹かせてあげましょう！」

アレ、何なのこの皆で直談判しに行つてやるぜ！みたいな雰囲気。フランちゃん何も分からない。

「ホラホラ、行きますよ楓さん！フランちゃんもゆつく湯船に浸かってないで動きますよ」

「へいへい〜」

「何ですかその返事……もつとアイドルらしくシヤンとしてくださいよ」

「私、怠惰姫つて肩書きでステージ立とうと思うの」

「止めといたほうが懸命だとボクは思いますけど……」

「まあ、だよね」

怠惰姫ってちよつと言葉自体もアングラっぽいしね。大企業のアイドルにつける属性としては色物過ぎるか。まあロリババア吸血鬼っていうのと比較したらどんぐりの背比べみたいなものだけだよ。

「ともかくプロデューサーさんのところに行きますよ！」

何故か一番盛り上がっている幸子に連れられ、ゴシックドレスに着替えて人気の少ないオフィスを駆け足で移動する。因みに346プロはクリーンなので事務員などは殆ど残業がないらしい。アイドルもそうであつて欲しいなあ、とか星に願つてみる。その辺は完全にプロデューサーの努力次第なので下野Pには是非是非骨を折つて頑張つて欲しい。

ともかく、人が少ない廊下はとても走りやすければ目的地まで時間も大してかからなかった。

本部ビルにあるプロジェクトルームの一室、その扉の前でコソコソと私達は立ち止まる。幸子は冷たい扉にピトリと右耳を当てた。

「どう？ 下野Pいそう？」

「流石大手ですね……たつた扉一枚しかないのに全く中の音が聞こえませんかよ」

「流石の防音設備……」

思わず感心してしまう。こういうトコにお金をかけるのが大企業って感じだ。

「ほんの少し扉を開けてみては如何ですか？」

「そうだね、幸子開けて開けて」

「まあ良いですけど……」

幸子は何か含みのありそうな言い方をしながらも何も言わず、宝石を鑑定するみたい  
にゆつくりとドアノブを開くと、中から声が聴こえてきた。男の声で、二人。

片方は下野Pだ。何時もの胡散臭い雰囲気をつつ込め、珍しく肩を上下に動かしてい  
る。

……これは一体なんなのだろう？

クエツションマークを3人揃って浮かべていると、

「……どうしても駄目なんでしょうか？」

「くどいよ下野くん、世の中というのを舐めてもらっちゃ困る。まだ未熟な君に十全た  
る理解を求めるのは私としても厳しいと思ってるが、それでも決定事項というのは容易  
には覆らないのだよ」

「しかし契約上、所属はアイドル部となっているんですよ」

「分かっているだろう？ 賛同したのさ、上も」

普通の話し合い、という訳ではなさそうなのは分かる。ただ趣旨が見えない。

「……何だか割り込めない空気ですね」

困ったように呟きつつも、幸子は扉の向こうへと耳を更に傾ける。自分のいる部署のタダごとじやない様子は理解出来ているようだ。

ただこの場には一人部外者がいる。楓だ。戸惑ったように一歩扉から後退っている。凡そ日を改めようかしら、なんて考えてるのだと思うけど脱モデルしてアイドルになると豪語してるんだから妙に気を使う必要なんてないのにと思ってしまう。寧ろこれから所属するんだし共有知としても良いと思う。

「ほら、楓もちゃんと聞いとかなって。もしかしたら大事なこともかもしれないわよ」  
「でもまだ私はモデルですし……」

「どうせアイドルになるんだから関係ないって!」

手を捕まえると楓は諦めたように扉の前で立ち竦んだ。ちよつぱり居心地悪そうとはいえ仕方の無いことである。だからまあ、うん、諦めて?そもそも私達、楓の用事でここまで着いてきてるんだから。

隙間から覗いていると、下野Pは更に追い詰められたように指をカタカタと震わせながら。

「でも今西部長の許可はどうなんですか!?!いや、それ以前の話ですよこれは!人事部を通してるんでしょうね!」

「全く……若いつて良いねえ。羨ましいくらいにエネルギーシユだね下野くんは。どう

だい？その敏腕っぷりをウチで振るうってのは？」

「話を逸らさないでください吉井部長！」

……人事部？

思わず幸子と顔を見合わせる。どうにも私達にも無関係って話では無さそうだ、それどころか最悪……。

嫌な予感を振り払うかのように頭を振ってる間にも吉井部長と呼ばれた壮年の男は話を続ける。

「良いじゃないか、キミたちは確かにアイドルを一人失うだろうが別にプロジェクトとして定員が決まっている訳じゃないだろう？それどころか根幹であるプロジェクトだって未定っていう話じゃないか。アイドル業界の盛り上がりに乗じて取り敢えず後追いでアイドル部を創設してみた方がいいが指針が無いのだろう？アイドルは既に複数人スカウトしているとも噂に聞いている、なら問題ないじゃないかな下野くん」

「……それは、違います」

「はて？何か他にあったかな」

「……フランさんをアイドルにすると俺は約束したんですよ」

……ふえっ!?!私!?!

幸子から驚いたような視線を向けられ、小声で「まさかもう何かやっちゃったんです

か……!？」と聞かれたけど驚き桃の木山椒の木で固まった私の唇は開かず首をブンブンと振るのみである。

「そう、フラン。フランドール・スカーレットだよ下野くん。アレは天与の資を持つ天使だよ、それ以外に形容し難い。出来るはずもない。容姿もいい、将来性もある。何より歌唱力がズバ抜けて素晴らしいんだ、ああ、いや。そんなのは言わずもなだらうけどね。あの場にいたキミも重々承知だろう?」

「……ええ」

下野Pはギリツと歯を噛み締めた……ように見えた。

「別に新人アイドルの初レッスンに興味があつた訳じゃないんだよ、だから本当に偶々だった。偶然なんだよ。気まぐれに大浴場に入ろうとして、見つけてしまったんだ天の卵を」

「……それでビデオカメラで撮影していたんですよね、その光景を」

「ああ、そうだよ。私はこれでもスカウトマンとしてだつて現役だからね、カメラを持っていたのは当然さ。と言つても最近はめつきりピンとくる子に合えなかつたのが実情だけどもね」

「隠し撮りをしていたことについての弁明は?」

「隠し撮り? いやいや、それこそ詭弁つてもんだよ下野くん。あの子は歌手になるべき

素質を持っている。勘違いしてほしくはないんだが、アイドルになる事を否定する訳じゃないんだ。大成するだろう、私はあの子の素質を買っている」

「ならアイドルにさせて下さい。それがフランちゃんの望みであり」

「いいやそうじゃない、違うんだ。違うんだよ下野くん」

まるで小さい子供を諭すように。

しかし傍から見れば馬鹿を内心嘲りながら言い聞かせるように、吉井部長は語る。

「アイドルでも成功するだろう。確実に並より上へは行けるだろう。だが歌手になったら確実にそれ以上の大成を見込める。346のバックアップさえあれば一躍トップクラスに上がれると私は考えている。——これは美城という企業の利益を慮った上で判断でもあるんだよ、分かるかね」

「それ、は……」

「分かっているだろう？ 理解しているのだろうか？ 優秀なキミのことだ。その酷く辛い唐辛子のような激情さえ飲み込んでしまえばどちらがよりリスクリターンが優れていて結果が成せるものなのかを判断付かない訳がない。そうなんだよ、企業判断としてリターンが確実に見込める選択肢を取るのには極めて普通だと思うがね」

……話が大体読めてきた。

つまり、あの吉井部長は私を引き抜いたのだろう。決定事項だのなんだのつていうの

もあるけど、何より下野Pの焦りようはタダ事じゃない。

「……思い出しました。あの方、確か歌手部門の部長さんです」

「なるほど、だから何だかプロデューサーさんに偉そうに言ってきたる訳ですね」

率直にムカつと来ましたよ、と幸子は言う。

同感である。人の神経を逆撫でるような言葉遣いには何度も嫌に気分させられた。下野Pだって同じだったはず、それでも抑えているのは一様に面子を気にしてだろう。特にアイドル部というのは出来たてで、未だ社内でも力は持っていない。そんな中他部署との関係悪化などしたくないはずだ。

そんな気持ちも露も知らないのか、知っていて煽っているのか。吉井部長は息をついた。

「……まあ、理解出来ないキミを私は理解出来ているつもりだ。だから切り口を論理的に転換しようじゃないか。そうだね——キミはフランドール・スカーレットをトップアイドルに出来るのかい？ 歌手としてなら才能のみで立てる雲海遍くステージに、キミはアイドルとして足りないファクターを見事補ってそこに立たせることができる自信と可能性があるのかい？」

「俺……は、フランちゃんをトップアイドルに……」

「ナンセンスだ、落第点だな下野くん。口だけなら誰でも言える。誰でも突ける。誰でも



も動かせる。故に机上の展望には興味が無いのだ、申し訳無いがこれは可能性の話じゃないんだよ。蓋然性の話さ。実績を何も無いアイドル部にいるような子じゃないんだ彼女は、分かるかね？」

「じゃあ実績があれば良いんだよね？」

堪え切れなかった。

私は膝を突いて盗み聞きしてたの止め、半開きだった扉を完全に開け放って部屋に入る。

「フランちゃん……!？」

「下野Pがこのままじゃ折れそうで心配だからね」

ホント、普段みたいなのにのりくらりとしてるならともかく、こんな必死になるなんて。らしくない、らしく無さすぎるよ下野P。

「これは丁度良かった、フランだね？」

「貴方は初対面の人にも名前でも話しかけるタイプの人間？」

「あはは、これは失礼。私は歌手部門の部長、吉井嘉一というものだ」

目の前で見るとにこやかな、しかし裏の意図を含んだ笑みに見える。こういう胡散臭い人間しかいないのか芸能界は。

「まあいいや。それよりさつき実績が伴えばって言ってたよね？」

「ああ、言ったとも。その通りだ、その上で何かあるのかい?」

「下野P、本格的にアイドル全員が出揃って顔合わせするのはいつになる予定なの?」

下野Pはこの状況をイマイチ理解できていないといった様相ながら「……まあ、ざつと地方からの子も考慮して三週間後だろうね」

「へー。なら大体それまでにある程度アイドルとして形に出来れば歌手部門の部長としても文句ないってことになるよね?」

そう。

詰まるところアイドルとして大成出来る見込みがあればこの部長は何にも口出しして来ないのだ。

吉井部長は企業としての最善手を考えている。同額投資したらどちらがより多いリターンを齎すかといった思考回路を第一に据える、言ってしまうえば合理的な人間なのだろう。

吉井部長は悠然と態度の大きいヤンキーみたいに足を組む。

「文句と称されるのは心外だね。しかしまあ、間違つてない。現実的でもないがね」

「現実的じゃない、なんてそんなの分からないじゃない」

「うん。まあそうだね。つまり、挑戦かい?」

「挑戦?」

「だってそうじゃないか。聞いていたのだろう？キミは来月付けで歌手部門に所属することになる。それを撤回したいならば私を納得させるようなライブをすればまあ、場合によっては考えなくもない」

「うーん、煮え切らない言葉だけど。いいわ、受ける」

「胆力があるね、うん。益々来月が楽しみだよ」

じゃあ私は仕事があるから詳細は後々にね、と吉井部長は幸子や楓の横をすり抜けてニコニコと気持ち悪い笑みを浮かべて廊下へと消えてしまった。下野Pは面倒事を抱えてしまったみたい溜息を一度吐く。

「結局こうなっちゃったかあ……」

「まるで予期していたかのような言い草ね？」

「まあね」

吉井部長が消えたのを確認して一段落したのか、下野Pは外した仮面を再び付け直したみたい能面に戻る。何となく予感があったけど、やはりあれすら策略の一つだったらしい。全くもって、そのまま仮面被り続けていれば良いのに。

「少し感情的になれば行けるかなあっと思っただけど、徒労だったみたいだね、いやあ失敗失敗。……やっぱ無理。無理だねコレ。軽く流そうと思っただけどホント無理。落ち込んだ。一応俺の取れる最後の手段だったんだけどね。はあ……」

「あれですら素じゃないのね。やっぱり油断ならないわコイツ」

「フランちゃん？詐欺師みたいな扱いをされると流石に俺でも傷付くよ？」

実際似たようなもんじゃん。部長相手に腹芸してる時点で相当な道化師だよプロデューサーは。

「それよりこれってどういうことなんですか!?!ちゃんと教えてくださいよプロデューサーさん!」

「あれ、幸子ちゃんまで居たの」

「プロデューサーさん、お久しぶりです」

「うん久しぶりだね楓さん、——楓さん!?!」

一気にアイドル（未デビュー）とモデル（廃業予定）が加わって場がカオスになったんだけど。

楓さんは少し控えめに幸子の少し後ろに立つと、

「プロデューサーさん……。実は私、モデル辞めてアイドルになろうと思います……。けど今はフランちゃんのことを第一に考えて下さいね」

「突然横から銃を突きつけられて玉入ってないよ?と言われた人間の気持ちになってる今」

「いや今はそういうの本当に良いですから」

ジョークなんて言う余裕すらある下野Pを幸子はジト目で心底呆れたように見つめている。それに気づいた下野Pはコホン、と誤魔化すように咳払いをすると口を開く。

「楓さんへの話は追々絶対に確実に執り行うとして、先ずはフランちゃんのことだね」

「そうですよ！フランちゃんが歌手部門に異動しなきゃならないってどういうことですか!？」

「いや〜まあ、ね？聞いたなら分かっているとと思うけど不可抗力なんだよね基本的に。歌手部門の部長の、アイツ吉井っていうんだけどどうにもフランちゃんの歌唱力に惹かれちゃったらしくてさ。色々と手を回して人事部まで説得しちゃったっぽいんだよ、ありやマトモな手段じゃないと思うけどね。出来れば俺だけの問題で収めたかったんだけど……」

ナチュラルに部長のことを呼び捨てにしてるけど良いのかなこのプロデューサー。

下野Pは私の方にゆっくり向き直る。

「フランちゃん、どうにも三週間で吉井を納得させるくらいライブをしなきゃならぬことになりそうなんだけど、行けるかな？」

「……もしかしなくても下野P。最初から落としどころがこうなること予測してたよね？」

「ん？どうしてそう思うの？」

「だって明らかにレッススが厳しいんだもの。確かに私も幸子も体力はそこまで無いけど、倒れるまでやるなんてハードだわ。まるで追い込みレッスンよアレ」

「うーん、本当にその通りなんだけど良く分かるね」

と言われても。

寧ろこつちとしてはよくも理由も言わず疲労困憊のまま踊らせてくれたなと言ったところ。

「え、ちよつと待つてください。じゃあボクは巻き込まれ損なのでは……」

「まあまあ幸子ちゃん、その分幸子ちゃんのアイドルとしてのカワイさも成長してるからや」

「なるほど！ボクのカワイさが磨かれるのでしたら納得……つて騙されませんよ!」

「惜しい」

「惜しくないですー!」

口を鋭くして抗議する幸子を軽く流しながら下野Pは一息ついて。

「それで、申し訳ないながら俺の力及ばずこうなっちゃった訳なんだ。ついては、これから三週間は今まで通り厳しいレッスンになるよ、付いていける?」

……まあ、愚問だよな。

「やるに決まってるじゃん、その為にここに居るんだよ私?」

「そっか。なら問題無し！今日は解散！」

「プロデューサーさん……私は？」

「あ、楓さんは残ってて下さい。ついでにどういう事か説明して下さい。という事で小學生組は夜も更ける前に帰った帰った」

「追いやられるように私と幸子は下野Pに押され、プロジエクトルームを閉め出される。お膳立ては一応しといたからあとは頑張つて欲しいと思うフランちゃんなのである。」

「ん〜。取り敢えず下野Pは楓にうんと言われてほしいよね、割と本気で」

「少しは煙に巻かれる私達の気持ちも理解してくれば良いんですけど」

「それすら煙に巻きそうだからね、口巧いし」

「天職は詐欺師なんじゃないんですかねプロデューサーさんは」

「遠い目で無駄に長い廊下の先を見つつ幸子は呟く。」

「それにしても人っ子一人も歩いてないんだよねこの廊下、アイドル部門の人間がまだそこまで多くないっていうのもあるかもしれない。」

「まあいいや、帰ろうか」

「そうですね。……あの、本当にフランちゃんの家にお邪魔しちゃって良いんですか」

「そう言えばそんな話してたね、色々あつてすっかり忘れてた。」

私はしーっ、と口到人差し指を当てながら。

「……今日、家に誰もいないから、ね？」

「紛らわしい言い回し禁止です！ マスコミにスクープされたらどうするんですか!？」

「その時は下野Pにブン投げれば何とかしてくれるよ、多分」

「適当すぎません!？」

「事実無根だしへーきへーき、世の中無いことを証明するのは吸血鬼難しいのよ?」

「何なんですかその鬼難しいみたいない方……いや確かにそうなんですけど。いえ、それ以前にもっとフランちゃんアイドルとしての自覚を持ったほうが良いと思うんです!」

え、何か私怒られてるのこれ？

それから家に帰るまでの道中、幸子にずっとアイドルとしての心得を教えられることになる。



## 始まりの場所

自慢じゃないけど私の家はかなり広い。分譲住宅として売られてる普通の一軒家と比較したらその三、四倍以上はあるだろう。無茶苦茶デカイ。

なのにそこで住んでるのは現在私とお姉様の二人、しかもお姉様は殆どの時間を学業やら仕事やらで外で過ごすから実質殆ど私だけみたいなので。

「ひ、広すぎませんか!？」

「まあね」

「ふ、ふふーん!ま、まあボクのカワイさはこのステージには収まりきりませんけどね!」

私の背たけ3つ分くらいありそうな門を前に立ち止まって幸子は張り合うように胸を張った。門の向こうの庭は広大な、と言うと少し過剰な気もならないけど、でも普通の家の庭とは比較できないくらいには大きい。

けどぶっっちゃけ。

最近はワンルームマンションとかに引っ越したいなあ、とか考えちゃう事も多い。私の手に余るし。

「お部屋とか幾つあるんです？」

「11部屋くらいだったと思う」

「うわ、本当に多いですね……。手入れとか大丈夫なんですか？」

「割と駄目かな」

「駄目なんですか」

「駄目なんです」

そりゃ私だけでこの家を管理しろなんて無理ゲーにも程があるよ。この家、仮に四人暮らしだとしても確実に要らない広さだし。私の両親は何を想定していたんだろう。少なくとも私には分からない。

門を開けて無駄に広い敷地に入って、無駄に大きな扉の鍵を開ける。無駄という表現が頭についてしまうのはしょうがないことで、活用出来ない以上本当に無駄でしかないのだ。無念。

「スカーレット家によろこそ、歓迎するわ」

開いたドアの前で私は幸子の方に振り返る。これはチョットしたイタズラ心なのだ。

気品のある、それこそお姉様がいつもやってそうな仕草で優雅にドレスの端を摘んで一礼してみる。最もお姉様ならポカして転んで失敗が常だけでも。結構グズだし。それに做う理由も無いので私は完璧に完遂する。

幸子は両親の修羅場を見てしまったみたいにして少しの間私を戸惑うように見ると、「フランちゃんかやると凄いやーラを感じますね……」

「えへへ、まあね」

伊達にお姉様のカリスマ（笑）の背中を見て育ってないのである私も。

お、お邪魔します、と幸子は若干腰を引きながら玄関ドアをくぐる。

中に入ればまず目に飛び込むのはエントランス。明らかに壊したらメチャメチャに怒られそうな高いインテリアが置いてあったりシャンデリアが吊るされていたりする。と言っても怒る人間なんていないんだけどね。

「フランちゃんの家ってその、凄いやーラお金持ちなんですね」

「ガワだけはね？」

「ガワだけ？」

良い機会だし案内してあげるか。

物は試しとばかりにリビングに隣接するキッチンへと足を向ける。

台所自体は十分に広々とした空間だ。スタイリッシュなキッチン家電やオシャレな小物が置いてある。自分でもアレだけど、そこそこ高級感が漂ってる。

だけど冷蔵庫の中はそんなハイエンドな家の中と違い、かなり所帯染みてる。あるのは近くのスーパーで買ってきた100gあたり100円ちよつとの豚肉だったり有名

食品メーカーの冷凍食品だったり普通のもの。余った惣菜がジップロックに入ったりもする。

言っつてしまえば建物とその生活の実態がミスマッチしてるのだ。

「……本当ですね。何というか、ここだけは普通の家みたいですけど」

「うん、消耗品とかは近所のスーパーで買ってるからね」

「なるほど……?」

何だか一度に詰め込みすぎてよく分からないみたいなお表情をする幸子。うくん、イマイチ呑み込めてないみたい。

「これでも色々節約してるのよ? スーパーのタイムセールを使って食費をやりくりしたりね」

「えっと……? フランちゃんの家のお買い物とかしてるんですか?」

「え? そうだけどなんで?」

「いや、何というか意外ですね……」

意外って……私の見てくれは私服がドレスっていうのもあって良いとこの令嬢みたくに見えるかもしれないけどさ。

「二人暮らしたから当然だけどね」

「そ、そうなんです。だから家事も一通り出来るって言ってたんですね」

明らかに気を使った風に幸子は話題を反らす。私自身は両親の事とか覚えてないから別に良いんだけどね。

——それよりも私は。

「ふふーん！ですが今日は世界一カワイイアイドル、イコールこのボクが手伝ってあげます！」

一瞬、思考が深遠へと引つ張られそうになったけど幸子の一声で元に戻る。

「ありがと、助かるよ」

久々にふと思いつ出した衝動を隅に置いて、そんなありがたい申し出に頷く。

贅沢を言うなら料理よりも掃除をお願いしたかったりする。二人分の料理なら私一人でも簡単だけれどデカ屋敷を掃除するのは無理だからね。……アイドルとして貰う予定の給料でハウスキーパーでも雇おうかな？でも知らない人間を入れるのはそれで嫌だしなあ……せめてもうちよつと住人が多ければいいんだけど。

なんて考えながら窓に映る己の相貌の向こう側を覗く。どうやら気付けば日は傾いて地平線の彼方を燃やし尽くすみたいだに空の境界を紅に染めていた。もうこんな時間かあ、と思わず一息。何だか今日は濃い一日だった。

「荷物を置きたいんですが使つていい部屋つてありますか？なるべくボクに相応しいカワイイ部屋で」

そう言って幸子は少し重そうに背負っていたバッグを床に下ろす。バッグの底が教科書なのだろう、ゴトリという音がフローリングに響く。

「うくん、カワイイところねえ……。ならトイレとかどう？お姉様が拘った香水とか便座カバーとかが無駄にあしらわれてるわよ？」

「何でそうなるんですか!？」

実際そうなんだけどなあ。昔雑貨店で5時間くらい選別して買ってたし、まあ私はその間帰ったから後から本人に聞いたんだけど。

「まあ空いてる部屋ならどこでも使っていいわよ？」

「ありがとうございますフランちゃん」

「……空き部屋、あんまり掃除してないからゴキブリには気を付けてね」

「ゾワツとする言葉言うの止めてくれませんか!?!大丈夫ですよねその部屋!?!」

「ごめんごめん、冗談だよ。毎月バルサン炊いてるから」

「それはそれで過激というか……」

お姉様も私も大の反ゴキブリ主義者だからしょうがないわ。出たら殺すし出なかつたらそれはそれで殺す。死ぬまで殺すわ永遠に。奴らに慈悲も憐憫も無いの。

「フッフッフ……」

「あの、フランちゃん？物騒な顔をしてどうしたんですか……?？」

「ハッ！ついゴキブリへの殺意の波動に目覚めてた……」

「言葉まで物騒にならないで下さい！狂ったような目つきになったから一瞬背筋がゾツとしたじゃないですか！」

友達になる人間違えましたかね……、とか幸子はボヤクように呟いた。聞こえてるよ？

まあ学校じゃ喋る相手こそいるけど基本ぼっちだし、幸子には感謝感謝だ。

幸子はふと思いついたように、そう言えば、と切り出しながら部屋に飾られてる写真立てを見た。

「もしかしてですけど、フランちゃんのお姉さんってレミリアさんですよ？人気アイドルの」

「そうよ！お姉様は凄いのよ」

写真には私とお姉様が写っている。

プロデューサーが撮った写真で、背景はこの大きな家だ。

「やっぱりそうだったんですか！スカーレットって聞いてそうじゃないかと思ってたんですよ！」

「サイン要る？」

「良いんですか！じゃあフランちゃんお願いします！」

幸子は嬉しそうにどこからかサイン色紙を取り出すと、なぜか更にもう一枚取り出した。

……二枚目？両親とか友達に渡す用だろうか？

頭を捻っていると更に油性ペンまで取り出した。

「幸子、流石にペンは要らないわよ？」

「違いますフランちゃん。これはフランちゃんに書いてほしいんです」

「私に？」

はい、と頷く幸子に私は首を傾げてしまう。

まだ正式にデビューすらしていない私なんてこの業界じゃペーパーの見習いである。

幸子だって同じ身の上な訳だし分かってるはず……。

幸子はそんな私の戸惑いを解すみたいに微笑んだ。

「こういう機会だから言いますけど……ほら、ボクとフランちゃんはこの346プロで新人の中では一番古参のアイドルな訳じゃないですか。将来の事はよく分かりませんが……それでもこの時の事を、ボクたちの始まりの光景を覚えておきたいんです」

「始まりの光景……」

「そうです。ボクたちはここから始まるんです」

渡されたサイン色紙に目を落とす。



不思議と、ただの厚紙なのにまるで鉄球を持ち上げてるかのように凄く重く感じる。いや、実際重いのだろう。

何にも書かれていない真っ白なサイン色紙。それ自体は軽くとも、そこに描く為に一描き、二描きと線を描いて色を塗っていくのはとても難しいことだ。

「……ねえ幸子、もう一枚貰っていい?」

「いいですけど……何に使うんです?」

「じゃあ、はい」

私は受け取ったサイン色紙をもう一度幸子に突き返した。

「私だけ描いても不公平でしょ?ここには2人いるのよ。それなら幸子も居ないとおかしいじゃない」

「フランちゃん……」

「だから、幸子のサイン。私にも……書いてくれる?」

私たちが始める最初の光景だなんて言うのに私しかサインをしないなんて道理に合わないわ。始めるのが2人なら、サインだって2つ居るでしょ?」

幸子は呆気にとられたような顔をして、それから意思を堅くしたように力強くサイン用紙を受け取った。

「分かりました!フランちゃんはカワイイボクに出来たファン二号ですしね!特別にハ

チャメチャにカワイく書いてあげます！」

「ファン二号なの？」

「二号はプロデューサーさんです」

むふー、と幸子はドヤ顔で（無い）胸を張った。

ああ、なるほど。下野Pも何だかんだと言われてるけど信頼されてるなあ。

感慨に耽りつつ私は早速ペンを取った。その場でサラサラと描こうとしてみる。

……でもサインってどう描けばいいんだろう？ 思えばサインって大体独特な形をしてるよね。

自分の名前を崩して書くと言つても中々に思い浮かばない。芸術家だったら筆記体みたいに書けば良いのかもしれないけど、アイドルなんだからふわっと優しいタッチにしないやならないし。

……ここまでペンが止まるのも久しぶりかも。初めて自分の名前を書いた時ぶり以来かな。

むむむむむ、と我ながら見事なまでに悩んでいると幸子はサラッと書き上げた。

「むふー！これはカワイイ出来映えです！」

「え、もう出来たの？ 幸子早くない？」

「これくらいアイドルの嗜みですよ。出来て然りです」

と、鼻高々と幸子は自分で書いたサイン色紙を眺めてる。

何でもないように言ってるけれど実際は凄い練習をしたのだろう。手慣れた様子だったしね。

でも幸子はそういう所は絶対に見せないのかも。そう思うと本当にカワイらしいなあ、とか感じちゃう今日のフランちゃんである。

「あれ、フランちゃんはまだ出来てないんですね?」

「……初めてだからでしょうがないわ」

プイツとつい横を向いてしまう。しょうがないの、生姜だけに。……………ハッ、今誰かの電波を受け取った気がする。

よく分からないダジャレが突然湧き出たことを不思議に思う私を他所に、幸子はドヤ顔で先生みたいな表情を作った。

「しょうがないですね、この全国一カワイイアイドルことボクがカワイさ抜群のサインを書く秘訣を教えてあげましょう!」

「ウザ……あ、ごめん。今の発言は無かったことに」

「ならないですから!?!ホントそういうところですよフランちゃん!」

「えっ。……ダメ?」

「可愛らしく小首傾げてもダメですよ!アイドルとして黒い面なんてファンに見せちゃ

ダメなんですからね！」

「えく面倒だなあ。私495才なのに」

「面倒とか言わない！あとと言つときますけどその逆鯖もムリがありますから！」

逆鯖じゃないんだけどなあ……寧ろ原典的にはそっちが正確なまであるんだけど。

何だかお母さんみたいな口ぶりだ。

とはいえ、幸子がサインが上手いのは見て分かる通り確かみたいだし有難く教わろうかな。

「仕方ないわね。教えられるのもやぶさかでは無いわよ」

「何でそんな上から……ボクの方が歳は上なんですけども。……まあいいでしょう！」

「うい」

「返事は”はい”ですよ！」

「はいはい」

”はい”は一回！」

「分かったわ……はい」

何でそんな不服そうなんですか、と幸子はぼやきながらもペンを握った。

ここはステージじゃないんだから別にありのままの私でいいと思うんだけどねえ、とか思っちゃっても口には出さない。出したらまた水掛け論になりそうだし。

「サイン用紙使うのも勿体無いんで、何か書かれるものありませんか？」  
「書かれるもの？……あ、紙のことね」

ややこしいな。何で受動態なの。

紙質とか関係ないと思うしその辺のチラシで良いかな。

丁度近くのテーブルに放り投げっぱなしのスーパールのチラシがあったからそれを取ってきて、幸子に渡す。

「ありがとうございます。じゃあ早速やっていきましよう！カワイイボクによるカワイイサイン教室！」

「おー！」

「まずサインの時に意識することなんですけど全体のバランスが大切です」

「なぐる。普通に文を書くときもそうだよね」

「それで、これも重要なんですけど始めの一画面と最後の二画が一番印象に残りやすいんですよ」

「ほへえ！幸子、本当に教師みたい！」

「ムフー！もつと褒めてもらっても構いませんよ！」

「あ、続けてどうぞ」

「それは流石のボクも落ち込みますよ……？」

と、グダグダと幸子の授業を受けること15分。

下書きも一回して、遂にサイン色紙に署名する時が来た。

「フランちゃん、力を抜いてください。コツは流麗に書くことですよ」

「りようかい」

椅子に座り直して、私は目線を下げる。

机に置いたサイン色紙を左手で抑えながら、右手で書く……！

ペンはスラスラと滑らかに動き、その足跡は確かに色紙に残った。

それを見た幸子は、何だか冷や汗を掻きながらどの言葉を選ぶか悩むように固まると。

「————良いんじゃないでしょうか………」

「幸子、流石の私でも無理しなくても良いかなあつて思うんだ」

ガタガタとした不安定な文字バランス。

そして丸みを意識し過ぎたせいで異常に大きくなってしまったフランドールの「ル」。

……流石に10分やそこらじゃ、私には無理だったよ。

せっかくのサイン色紙だけど失敗しちゃった以上、これはゴミ箱行きだね。

「……幸子。私、練習するわ。だから上手くなってからきつと渡すよ」

「————いえ、これを下さい」

……えっ？

幸子はそう言つてゴミ箱に持つていこうとサイン色紙を持つた私の手を掴んだ。

「フランちゃん、ボクはさつきこれが始まりの光景つて言いましたよね？だからこれも、その一つだと思ふんです」

字がミミズが這つたみたいに歪んだサインを見て幸子は真剣に言う。

……言われてみれば、これも始まりの一步に過ぎないのかもしれない。

きつとこれから必要に応じて私のサインは上手くなるだろう。サインだけじゃない。ダンスだつて、歌だつて上手くなる自身がある。

これが私のアイドルとしての原点なのだ、なんて思えば「カワイイ」ものじゃないか。

「……じゃあ幸子、一つだけ約束してくれたら良いわよ？」

「何でしょう？」

「そのサイン、絶対に人に見せたりしないでよね？」

と自己肯定してはみたものの、恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

下手なサインなんてあんまり人に見て欲しいとは思わないからね。

「分かりました！それじゃあ我が家の家宝にします！」

「それは絶対にヤメテ」

「もくフランちゃんは照れ屋ですなぁ」

「なにその親戚のおばさんみたいな発言……」

「失礼な！ボクはカワイイ美少女アイドル輿水幸子ですよ！」

「はいカワイイカワイイ」

「心が籠もってませんよフランちゃん！」

「そこはかとなくウザカワイイわよ幸子」

「フーン。そうです、ボクはカワイイんです!!」

「都合の悪い部分は聴こえなくなる幸子イアード……」

自分でも言うのはなんだけどシリアスな雰囲気の木っ端微塵だよ全く。

幸子は仕方ないですねえ、と溜め息を吐いた。

「アイドルをやるんですから羞恥心なんて或る程度割り切り切りなきやダメ、なんですけどまあ良いです。フランちゃんにはフランちゃんの個性があるでしょうし」

「うん？どゆこと?」

私の個性？

私なんて頭脳明晰なのを除けばただの女子小学生だと思っただけ……。

幸子は珍しく、少し難しい顔で口を開いた。

「今はアイドル最盛期と言っても過言じゃありません。多くの女の子がボクたちと同じ



ようにトップアイドルを目指して切磋琢磨してるんです、そうすると人気になるには他の子との差別化がどうしても必要になってくるんですよ」

「なるほど……。幸子なら大丈夫だね。でも私って個性無いしなあ」

「フランちゃん、それはボクへの宣戦布告って事で良いんですね？ 普段温厚なボクでも怒りますよ？」

「え、なんで」

そんな凄まれても私には何の覚えも無いのだけれど。

「ジーツと幸子は足のつま先からつまじ、と言うか帽子のてっぺんまで確かめるように目を細めると。」

「その稲穂が靡いてるみたいな綺麗な金色の髪！ 純白で毛穴一つ見えない滑らかな肌！ フランちゃんは見た目だけなら西洋のミステリアスな姫君みたいな雰囲気があるじゃないですか!？」

「えー。でも幸子の方が個性立ってるじゃん。ボクはカワイイ！なんてドヤ顔で言えるの多分この世で幸子だけだと思うの」

「そりゃあそうですよ！ ボクはカワイイですから！」

「自分で言うのもアレだけど今の別に褒めた訳じゃないからね？」

「フーン！ この素敵な家も見合って今日のボクは一段とカワイイですよ！」

って聞いてないし。しかもどうしようもないくらいに調子に乗ってるわね、これ。

またもや胸を張った幸子をぼーっと眺めていると、唐突に軽快な音楽が幸子のスカートから鳴り始めた。

着信かな？

「うえ!? 遂に来ましたかこの時が……」

「どうしたの？」

「あ、いえ……何でもないんです……ちよつと時間よろしいですか……」

「いや、別にいいけどさ」

——画面を見るなり表情を固めて、どうしてそんな冷や汗をダラダラ流してるみたいに額を拭ってんだろうか？

ゴクリと、幸子は何か辛いものを嚙下するように喉の奥へと流し込むと、画面に表示された通話ボタンを押した。

「……もしもし、ママ」

『幸子！ なにしてんの！』

「ごめんなさいすみません許してママ!!」

うおうっ!?

突然幸子が虚空に向かって頭を下げた……もしかして母親に無断で外泊してたりす

るのかな？

アレ、でも幸子って今は寮暮らしのはず……。

疑問を抱えつつも私はそのまま歯切れの悪い幸子と妙に語調の強い母親の会話を呆然と眺める。

会話の内容は聴こえないけど、幸子がずっと小さくなつて謝り倒してるの見える。

それから暫くすると、幸子がスマホから耳を離れた。

「フランちゃん、ママが話したいみたいですけど……良いですか？」

「分かったわ」

神妙そうな幸子の表情に、内心レアなもの見てる気がするなあと思いつつ幸子の熱で温かくなったスマホを受け取って、それから耳に当ててみる。

「もしもし、お電話代わったわ」

『あなたがフランちゃん？』

「ええ。私はただのフラン、フランドール・スカーレットよ」

『いつも娘がお世話になってます、幸子の母です』

落ち着いた大人といった感じの声で、幸子の数年後を感じさせるような雰囲気すらある。

まあ今の幸子見てると落ち着く気配なんてこれっぽっちも感じられないけれどね。

「こちらこそ、幸子には良くしてもらってるわ」

『あらあら、娘とは仲が良さそうでごよりだわ。それで、親御さんは今いらつしやるかしらっ。』

「居ないわ。明日の夜ならいるかもしれないけれどその保証も無いよ?」

『そうなのね、ご挨拶をしたかったのだけど。残念だわ』

「それより聞きたいのだけれど、幸子つてもしかして無断外泊してるの?」

頭の上に乗っている、ズレた帽子を右手でツンツンと位置修正しながら言う。

さつきから気になっていたんだよね。

電話の向こうで軽く息をつくような音がした。

『それねえ……。多分幸子の事だから見栄張って言わないだろうしフランちゃんにも迷惑掛けたから、幸子に内緒で言っちゃおうかしら』

「内緒なんだ?」

『私が言ったら拗ねちゃうから、フランちゃんもお願いね?』

「うい」

幸子つて私より歳上だよな?とかつい思ってしまうのは仕方がないだろう。

忘れそうになるけど幸子はまだ小学六年生なんだよね、しつかりしてるからイマイチ実感しにくいけど。

『幸子、夫にだけに346プロ行くから！つて言つて飛び出してきたらしいのよ。私の夫、幸子には激甘だから普通によし！行つてこい！みたいな感じで送り出しちゃつたらしくて』

「え？でも346プロの寮に入つて今日で2日目よね？貴方は知らなかったの？」

『共働きの。昨日は帰れなかつたのよ私』

なるほど。

つまりは純然たる幸子の暴走つてことだね。

『大変だったのよ？夫が余計な手続き済ませちやつたせいで346プロの方にも謝罪の電話入れて……つてごめんさいね。愚痴みたいになつちやつたかしら』

「そんなこと無いわ。幸子の猪突猛進つぷりを知れたから良かったわ」

『普段ならこんなことしない賢い子なんだけどね、アイドルになれるつて舞い上がつちやつたみたいなの。あ、これもオフレコでね？』

「はいはい」

確かに私の見てきた幸子はテンションこそ高いものの、向こう見ずつてほど考え無しな訳じゃないしね。

なんだかんだ言つてまだ小学生なのだ、幸子は。

「じゃあ寮は引き払つて、幸子は一旦強制送還？」

『そうね。加えてあの子にはお仕置きしないとね。何せ学校もサボってる訳だし』

「順当ね。存分にやっちゃえ！」

『ええ。存分に、ね。……話題は変わるけど、フランちゃんもどうして346プロに入ったの？』

憂慮がたつぷり籠もったみたいな、吐息を多めに含んだ声が電話口から漏れる。

346プロに入った理由って……何かしらその質問？

「私はスカウトされたのだけれど……まるで346プロに問題があるみたいない方ね？」

『まあ、今の346プロって少し、アレじゃない？』

「アレって？」

妙に歯切れが悪い。腐ったりリングに触れるみたいに言葉が一瞬止まった。

『……フランちゃん、テレビ見たりとか新聞読んだりとかしない？』

「しないわ、普段からそういう習慣はないけれど特に最近は忙しいの」

『あく、アイドルって大変なものね……なら仕方ないか。あんまり気分を悪くしないで聞いてほしいんだけど……346プロって最近良くない噂が流れてるのよ』

「良くない噂、ね」

『ええ。あくまで噂レベル。言っちゃえば実態は伴ってない不確実なもの。けどここ一

週間くらいはネットじゃもちきりよ』

「例えばどんななの?」

再び躊躇うように間が空いた。

『まあ、横領とかセクハラとか、色々ね。中でも某三流雑誌の今週号じゃ346社内の密告者からのリークとか銘打って見出しで売ってる始末……ちよつとフランちゃんには難しかったかしら』

「……馬鹿にしないで。そのくらい分かるわ」

『からかつちやったかしら、ごめんなさい?とにかく私は夫とは違って不安なのよ。まだ小学生で純朴な幸子を見ず知らずの人間しかいない、しかも色々とシビアな芸能界の事務所に預けるなんて……アイドルのことをバカにしてるわけじゃないのよ。それはホント』

「分かるわよ、私も芸能界に興味なんて無かったもの」

携帯を耳に当てたまま思わず頷いてしまう。

私なんてアイドルになる前からテレビを見るような生活をしてなかったし、なった今も未だにテレビなんて見ないからね。ぶつちやけ興味だつて無い。

それでもアイドルになったのは、偏に初日に見たアイドルのステージが忘れられないからだ。

『そうだったの』

「ええ。ともかく幸子の事は大丈夫よ」

『……? どういうことかしら?』

「幸子は私が守るもの」

幸子は私の初めてのアイドル友達で仲間だ。

どんな事があっても守る、とまでは出来なくても私の手の届く範囲の問題なら手伝ってあげられる。私だけじゃない、下野Pもいる。

「それに346プロは、少なくともアイドル部門はクリーンよ」

『そうなの?』

「ええ。悪人はいないし、変な人は——」

『変な人は?』

「——いるけど善人だから大丈夫」

『フランちゃん、本当に大丈夫よね?』

いけない、脳裏に武内とか下野Pが過ってしまった。

でも嘘は吐けないもの。私は悪くないのだ。

『ありがとうねフランちゃん。でもそんな気負わなくても大丈夫よ、何か困ったら私に連絡して。電話番号教えるわ』



「ええ、ありがとう」

口頭で言われる電話番号を書きとると『それじゃあ幸子に戻してもらえるかしら?』と言われたので適当な返事を返してスマホを幸子に渡した。

にしても、悪い噂かあ……。

武内や下野Pがそんなことするはずないだろうし、凡そウチの部門についてはガセなんだろうけど……。

ただアイドル部門以外の事は私には分からない。

他部門との接点なんてモデル部門の楓と、あと歌手部門の部長だけで。それ以外は話したことのある相手すらいない。

何となく、まだ波乱は続きそうだなあと思いながら私はスマホを取り出した。

## アイドルとモデルと女子高生 ( ? )

346プロ本社ビル、夜の帳が降りきり月明かりに照らされたデスクの上。

下野拓弥はまるで髪の毛が鉛になってしまったかのように項垂れていた。

普段は爽やかな笑み（と思っっているのは本人だけだが）を浮かべている眉間には皺が寄っている。

「……はあ」

文字を追っていた眼をほぐしながら、溜息をこぼす。

デスクの上に広げられたノートパソコンの画面に映っているのはまとめサイトの記事だ。

書かれている内容は346プロに関するもので、中身はいい加減な事実無根の炎上記事。それがつらつらと面白おかしく、悪意たっぷりと含まれている。

今現在、下野の頭を悩ませている要因だった。

「……どうしようかな」

ポツリ、現実逃避気味に出てきた言葉は誰もいないオフィスに響く。

346プロには数々の部門がある。

勿論アイドル部門も新参ながらその末端に名前が連なっており、なので例外無く火の粉は降り掛かっていた。

——大の老舗企業であるウチがセクハラ、パワハラ、枕営業。加えて使いもんにならなくなったら風俗に転身させる、なんてしてやるわけ無いじゃんか！

クソっ！と心の中で歌手部門部長（吉井）を殴りつつ、この炎上の影響を考えてみる。実際、炎上とはいえソースは不確実なものだ。ネットサイトにインフルエンサーのSNSに三流雑誌、どれも信用に足らない。賢いネットユーザーならこんなの何時ものガセ情報と片付けて真夏の羽虫を追い払うみたいに無視するだろうが、しかし要点はそこじゃない。

問題は企業イメージが損なわれる事だ。

芸能事務所というのは所属している人間をCMやイベントやテレビ番組など、各方面に売り込むのが主な業務である。

それが、最近346プロさん世間ではあまり良い噂ないしね、とクライアントから断られ他プロダクションに仕事を奪われたら大なり小なり悪影響が及ぶ。

まだ火種が生まれて2週間程度。

とはいえ或る程度ツテがある他の部門ならまだしも、これから売り込み予定である新興のアイドル部門ではそれはまさしく死活問題になる可能性も否定できない。

下野はスマホを手にとると、電話帳からある人物を選択してタップする。

どちらにせよ、話さなくてはならない事があった。

「……もしもし。今から話がしたいのですが……ええ。場所はそこで」

—————

下野という男は何かしら重要な話をするときいつもの場所と決めていた。

それも一つではない。

この点マメで、人によってそのいつもの場所と決めていた。

下野が今向かっているのも数ある場所の一つである。

346プロからタクシーで10分ほど移動すると、下野は雑多ビルが森のように立ち並んだ一角に入り、それからとあるビルの1階部分にある店のアンティーク調に彫り込まれた木製ドアをゆっくり押し開いた。カランカランと鳴る鐘の音が静寂な空間に響くさまに昭和チックな雰囲気を下野は感じながらも中にいた男の元へと歩く。

「武内さん、態々お忙しい所ありがとうございます」

「いえ。問題ありません」

武内は特に何も頼まずカウンター席で座っていたらしく、一杯くらい先に飲んでくれよと思いつながら下野は笑みを浮かべながら肩を並べる。

「すみません、僕はギムレットで」

「畏まりました。……そちらのお客様は？」

「……私も同じものを、1つ」

「畏まりました」

バーのマスターはそのまま背を向けて作り始める。

下野は少し呆れたように横目で見ながら「武内さん、指摘するのも気が引けるんですがもう少し主体性を持ちましょうよ？また僕のオーダーと被せてきましたよね？」

「すみません……お酒には詳しくないもので」

「アイドルプロデューサーと見えど一応芸能界の人間なんですから少しは興味持ちましょうよ」

先輩とは言え、思わず忠言してしまふ。

武内が仕事熱心で生真面目なのは知ってるが、どうにもそう言った娯楽方面には些か疎い。

（多分酒好きのアイドルの担当にならない限りは無理だろうなく、例えば楓さんみたい

な)

もし担当になったら確実に隔週ペースで酒に付き合わされ、嫌でも酒に詳しくなるだろう。

確信、もとい下野の経験談だった。

いやしかし今日はこんなことと呼び出した訳ではない。

「すみません。話が逸れてしまいました」

酒も入っていないのに何をやってるんだ僕は。

下野は不躰な発言をしたなあと思つてコホンと一息つく。

「武内さんは今の346プロのネットでの評判、知つてますか？」

「……ええ。承知してます」

「マズいですよね、コレ」

「はい。良くないです」

語調だけは軽いが割と深刻な下野の言葉に武内はいつもの仏頂面のまま頷いた。

「ですが根本的な解決策を出すのも難しいです。雑誌やまとめサイトなどは直接対応出来ても、個人のSNSやブログは厳しいです」

「分かつてます。その上で武内さんにアイドルデビューへの影響を聞きたいんです」  
「影響、ですか」

武内は考えるように少し眉を蹙めた。

そんなの、聞くまでもなく知っているに決まっている。分かりきったことだ。

だけど武内さんにしか分からないこともあるかもしれない、と下野は一縷の望みを抱きながら依然渋い顔で姿勢良く座る武内を見遣る。

「……恐らく、私も下野さんの考えている事と同じだと思われます。既に影響は小さいながらも出ていますし」

「影響……というと、武内さんの担当しているデビュー済みのアイドルグループですか」  
「はい。この一週間で先の案件を何個かキャンセルされています、確かに憂慮すべき問題ではあります」

「もうそんなにですか……」

「ですが、すぐに収束するでしょう。新人のアイドル方がデビューするまでには騒ぎは収まると私は思います」

樂觀的だ、とは下野は思わなかった。

そもそも新人アイドルがデビューするのに何ヶ月掛かるか。良く見積もって今から4ヶ月とか5ヶ月後とか、まだ少し先の話だろう。

火種が大きくならなければ特段気にするほどでは無いのも事実だった。

「そうですね……今西部長はなんと?」

「私と同じ見解です。リスク統括部もこの件には動いているそうですので」

「大事に発展することにはならない、と」

「その通りです」

下野はマスターから渡されたカクテルを受け取りながら、軽やかな笑みを浮かべる一方で絡まったイヤホンコードみたいにモヤモヤとした気分を拭えないことに一抹の不安を感じていた。

タイミングが良すぎる。

あと2週間ちよつとで漸く採用通知を送った新人アイドルが出揃うこの状況で、この炎上騒動。

会社や部門を傾けるほどではないにしても、新人アイドルのデビューを妨げる可能性が低いにしても、指向性のある嫌がらせにしか思えない。意図的な工作であるような気さえしてしまう。

しかし誰がそれを行ったかと言われれば下野は首を傾げざるを得なかった。

面白半分ですつち上げて流布されているの可能性も大いにあるが、ただ雑誌では内通者がいるとかなんとかおおっぴらに書かれていた。流石に三流とはいえ嘘を吐くほど馬鹿ではないだろう。

つまり。



その密告した人間が犯人な訳だが……、と下野はグラスに口をつけると武内が徐に口を開く。

「フランさんはどうですか？」

「順調ですよ。プライベートでも地道な基礎トレーニングで体力を付けようとしてるらしくて、トレーナーがオーバーワークを懸念する程ですよ」

「そうですか。それなら良いんですが」

「ただ、一つ問題があります」

「問題、ですか……」

「今日武内さん呼び出したのも実はフランの件なんです」

注文した癖に全くグラスを持つともしない武内にどうぞ、と勧めながら下野は考える。

吉井が簡単に諦めるのが想像出来ないのだ。

どうにもこの展開、自分だけではなく吉井も想像していたフシすらある。

こんな業界だ、腹芸の一つや二つは必要不可欠なのは重々承知である。しかし、かと言って吉井が意味の無いコケ脅しであんなことを宣わるようにも思えないのも本当だ。何かしらの確信があつての云為と解釈した方が理解が容易い。

元々腹の読めない胡散臭い男が相手な以上油断は出来ない、と下野はグイッとグラス

を飲み干した。

「実は歌手部門の吉井部長がフランに目を付けているんですよ。フランの歌唱力、武内さんも知っていますよね」

「ええ。聞かせていただきました。素晴らしい才能だと思います」

「吉井部長も聞いたらしいんですよ。その上でフランを無理矢理歌手部門に転属させようとしているんです」

「それは……」

武内の眉間が更に深くなった。

「2週間後、フランが吉井部長の前で小ライブを行うことになっています。それでアイドルとしての可能性を見せつけられたらその話をナシにするって感じなんです……」

「しかし吉井部長の言葉を鵜呑みにすることは出来ない、と」

「お察しのとおりです」

流石下野より芸能界が長いのもあって武内は直ぐに推察した。

いや、それだけじゃないだろう。

吉井部長の敏腕ぶりは社内ですこそこそ有名であるのと同時に、そのぬらりひよんみたいな言動で他部門からは煙たがられてるのである。下野だって本音を言えば関わりたくない男だ。

しかし、誰とでも礼儀を逸しずに接する武内さんですらそういうイメージなのかあ、と下野はグラスをテーブルに置く。

「それで、武内さんにも力添えをお願いしたいのですが……」

「分かりました。私に出来る限りならお手伝いします」

「……ありがとうございます」

直ぐに了承した武内に、下野は僅かながらの罪悪感を背に頭を下げた。

—————

今日は久しぶりにレッスンのオフ日だった。

いつも通りにトレーニングルームへ向かうと「オーバーワーク気味だから休めと昨日

言ったろう?」とトレナーに言われ、かといってそのまま帰る気にもなれなかったから取り敢えず346プロ本社にあるカフェに来ただけだ……。

「わあ!もしかして噂の新しいアイドルですか!」

「ええ。貴方は……ウエイターかしら?」

「はい!安部菜々といえます!17歳です!」

なんか面倒くさそうなのに捕まった。なんて思ってしまう私は悪くないのだ。

「……って噂?何のことかしら?」

「ご自身ではご存知無いですか?アイドル部に滅茶苦茶可愛くてエキゾチックな女の子が入ったって社内はもちきりなんですよ!」

「346プロで?」

「はい!」

こんな芸能人の巣窟で私みたいなただの女子小学生が入ったくらいでそんな事になるのかなあ……?

微かな疑問を胸に秘めつつ、私は安部菜々と名乗った女の人を見上げる。

女子高生というのは本当らしく、顔はまだ成長しきってない風に見える。の割にはメイド服から見えるプロポーションは豊からしく、出るところは出て引つ込むところはスレンダーに見える。

それだけじゃない。

肌はとても綺麗だし、爪の先も常に気にしてるのか汚れや溝一つない。髪も整っていで、表情はさつきからずつと太陽みたいに明るい。

うん、ただのウエイターにはとてもじゃないけど見えないや。

アイドルになつたら間違いなく売れると思う、分からないけど。

「もしかして貴方、芸能人志望？」

「ええ!?なんで分かつたんですか？」

「容姿とか凄い気にしてるでしょ?だから何となくそうかなって思ったの」

「凄いですね古畑任三郎ふるはたにんざぶろうみたいですよ！」

「ふるはた……?」

「……あつ!な、ナンデモナイデスヨー?」

よく分からないけど、話の流れ的には探偵か何かだろうか?

ま、いいや。

「私はただのフラン、フランドール・スカーレットよ。宜しくね」

「はい!宜しくお願ひします!つてそうでした、仕事しないとですね。空いてる席にご自由にごどうぞ!」

「分かつたわ」

忙しく接客に戻る菜々を尻目に空いてる席を探す。

午後三時というのもあるのか中々に人が多いね、空席は見つからないな。

とか思っているとこちらへ向かって手招きしている見覚えのある女の人が見える。

会うのは一週間ぶりくらいかもしれないね。

「フランちゃん、こっちこっち」

「あ、楓。今日はオフなの?」

「はい。家で過ごしていても良かったんですけどお麩を食べていても落ち着かなくて、

オフだけに。ふふっ」

「お麩?」

「……もしかして、ダジャレ?」

何というか意外だなあ。もっと大人っぽい趣味があるのかと思っただけど。

よいしょ、と私の背丈からすれば少し高めの椅子に座るとメニュー表を取ってみる。

「フランちゃんはここに来るのは初めて?」

「うん、そうよ。どんなのがあるの?」

「オススメはサンドイッチかしら。……三度食べてもいっちな番美味しいのよ。……ふふ

ふっ」

「すみませ〜ん、注文良いですか?」

無視して菜々を呼ぶことにした。

楓のギャグに対応出来るコミュニケーション能力は私には無いのである。そういうのは下野Pの仕事なのだ。

私の声を聞いた菜々が小走りでこちらへとやって来た。

「は〜い！フランちゃん、お待たせしました〜！ご注文は何にしますか？」

「サンドイッチセットにするわ」

「畏まりました〜！あ、楓さんはコーヒーのお代わり要ります？」

「じゃあお願いしようかしら」

分かりました〜！と笑顔を滂刺と元気に去って行った。

それを見送っていると、「丁度良いから、一度聞きたいことがあったの」と楓は手を両膝に乗せた。

「フランちゃんって何でアイドルになったの？」

「なんでって？」

突然の漠然とした質問に、思わずノータイムで聞き返してしまう。

何でかと言えばスカウトされたからだけど……多分それは楓の質問の答えとは違う気がする。

「だってフランちゃん、達観してるように見えるから。元々はあんまりそういうのに興

味無かったんじゃない？」

「達観、かあ……」

思い当たる節は、ある。

鉛筆と消しゴムのように、私という存在は生まれた時から理知と隣り合わせだった。すべてを悟っていた訳でも無いけれど、幼い時からそれなりに大人の事情も分かったし、幼児向けアニメとかは一度も見たことは無い。その時間は全て自分がフランドール・スカーレットとなった意味について、またはその皮を被ってしまったフランではない自分探しに費やされたのだ。

とにかく、生まれながら得た智慧から生じたこの一歩後ろに退いた姿勢を達観と表すのは間違っていないかもしれない。

思えば自分がアイドルになった理由を深く考えたことは無い気がする。

何故私は輝きたいと思ったのだろうか？

私である以前に”フランドール”である私にとって、アイドルとは何なのだろうか？

海面に顔を出そうとバシャバシャと藻掻くみたいに考えて、それでも結局は何年も前から懐に抱く私自身の命題に回帰する。

——そもそも、私とは誰なのだろうか？



普遍論争に頭を悩ませていたのが顔に出たのか、楓は気を使ったように口を開いた。

「……難しいかしら？」

「いや……アイドルのステージを観て、私もステージで輝きたいと思った……からだと思おう。ちよつと自信無くなつたけど」

実際のところどうなのだろうか。

この意志は果たして本当に私のものなのだろうか、なんて言い出したらキリが無いのは十全に解っているはずだけど……。

「私はそれで良いと思うわ」

「……え？」

「アイドル像って人それぞれじゃない。私、どんな理由であれアイドルはアイドルだと思う。ファンがいて、プロデューサーがいればアイドルは成立すると思うの」

まるで小さい子供に諭すように、静かに言葉は紡がれた。

楓は曖昧模糊で、何一つ自分のことすら理解できていない私を肯定した。楓は優しいのだ。いや、楓だけじゃなく。私の周りにいる人はみんなお人好しなのだ。

それでも底無しの沼からプクプクと浮き立つヘドロのように湧いた不安は、心の中で確かな存在感を持って膨らむ。

自分のことすら満足に理解できてないただの少女が、多くの人を楽しませるなんて出来るんだろうか？

「フランちゃんはどうして——」

憂愁な面持ちをした楓は、多分何か言おうとしたのだろう。だけど口を開いた瞬間に横から「はいい！」と別の声が入ってきた。

「お待ちせしました！コーヒーのお代わりにサンドイッチセットです！……つて何かありませんか？」

「——ううん、世間話をしていただけだわ。ね、楓」

吹っ切れない、納得出来ない。

そんな顔を浮かべてた楓だったけど、次の瞬間には桜も揺らぐような笑みを浮かべた。

「……そうですね。コーヒー、ありがとうございます菜々さん」

「いえいえ！つてそれよりも楓さん！」

「何でしょうか？」

「菜々は17歳ですよ！年下なんですからさん付けなんかしないで下さいよ！」

それもそうだ。

楓は少なくとも20才は優に越えてるだろうから、菜々は断然年下になるはずだよ

ね。

「……………」

「ど、どうして不思議そうに首を傾げてるんですか……………？ 菜々は17歳デスヨー？」

「何でカタコト……………アレ？」

「……………な、何ですかフランちゃん？」

ちよつと気になったので菜々を手招きしてみる。奈々は警戒心を顕にした猫みたい  
に恐る恐る、こちらへと足を踏み出した。

……………まだ高校生なのにフローラルの香水なんて付けて、このご時世の学生はマセてる  
んだなあ。

私は顔を当たらないように菜々のメイド服に近づける。

「スンスン……………女子高生なのにシャーペンの芯の香りがしない」

シャーペンの芯、即ち黒鉛である。

私の言葉に、何故か菜々はある日突然実妹がアイドル宣言をブチかました時みたいに  
酷く慌てふためいている。

……………これは、怪しい。

「犬並みの嗅覚!? え、いや、違うんです！ 菜々はシャーペン派ではなく鉛筆派……………つてそ  
れも黒鉛でした!? 間違えました今のは！ 違うんです！ 寧ろ今時の菜々みたいなJKと

なると友達もみんな万年筆派でして——」

「——菜々、もしかしてだけど今日学校サボったでしょ?」

「つまりシャーペンの芯なんてものは——へっ?」

「シャーペンの芯のニオイなんて冗談だわ、分かるわけじゃないじゃないそんなの。でも、マヌケは見つかつたみたいね?」

一度言つてみたかつたセリフである。えへん。

何となく最初から怪しいとは感じてたのだ。

午後三時からこんな大企業の社内カフェで働いてるなんて、普通の高校生ならまだ授業が終わつてないだろうに、おかしな話である。

したがつて高校をサボつてアルバイトしてるということは確定的に明らかなのだ。

核心を付かれたからか、誤魔化すように菜々は両手をワタワタとさせる。

「そ、そうなんです!今日はその、アレです!だるるくんつて気分だったのでつい学校サボつちやつて〜」

「駄目よ菜々」

「えっ?」

「学校をサボるなんて両親に申し訳ないじゃない?それに授業は菜々がいなくても勝手に進んじやうのよ?付いて行けるの?お友達にもきつと心配を掛けちゃうわ、それは良

くない事だと思うの」

我ながら内心でいつも学校面倒くさいなあと思ってる人間の言葉じゃない。

だけでも私だって毎日欠かさず通ってるわけだからこれくらい言っても許されて良  
いんじゃないだろうか、と自己弁護してみる。

「うう……仕方ないとは言え、一回り以上小さい子に説教されてしまいました……」

「ブフツ……！」

「笑わないで下さいよお……！」

楓が堪らないとばかりに何故か嘔き出して、菜々は何かボソボソと小声で呟いたり器  
用に怒ったりしている。

というか何でそんなに菜々は涙ぐんでるんだろう。

そんなに罪悪感残るなら素直に学校に行けばいいのに。

「アレ、楓と菜々って仲良いんだね」

「ぐすん……はい。楓さんはここに良く来ますから」

「確かに……暇があれば来てるかしら」

「ほええ。常連さんなんだ楓」

何というか、意外と言えば意外とかも。

「ミステリアスな雰囲気纏ってるからこういう大衆的ところは来なそうないメー

ジあるし……でも最初に会ったのは大衆浴場だったね。思つて見れば庶民派だ。

「比べて菜々はカフェでバイトしてるの凄いい合ってるね。天職？」

「違いますよ!!私の本職はアイドルですよ!？」

「え?高校生じゃなくて?」

「も、勿論高校生やりながらですけれど!」

なんだ、ちよつとビックリしちゃった。

でもアイドル?

……もしかしてアイドルを目指しているとか?

「言われてみれば……」

「な、なんですかフランちゃん……?」

「楓、菜々つてアイドル適正高そうじゃない?可愛いし、元気だし、それに女子高生だし」

「そうね……フフフツ……!」

「褒めてるのか馬鹿にしてるのかどっちかにしてもらえませんか!」

「え?私は褒めてるわよ?」

「ごめんなさい……面白くって……フフフ……!」

「楓さん!?!」

楓は堪らないとばかりにクスクスと肩を上下に震わせた。

何だろう、面白い会話なんてしてなかったつもりだけれど……意外に笑い上戸？  
菜々は「あつ」と声を上げると頭を下げた。

「すいません、お客様に呼ばれたのでこの続きは今度しましょう！」

「うい、頑張つて」

「フフフ……フフフフ……！」

特に楓さんは覚えてて下さいね！、と捨て台詞を言つてフリルを揺らしながら別の席へと行つてしまった。

「ふー……一年分くらい笑つたわ」

「何が面白かったの？」

「コーヒーを軽く傾けると「んー、ナイシヨよ」と微笑んだ。

気になるなー。楓のツボ。

まあもつと仲良くなつたらその時に教えてもらおう。

そんな決意を胸にサンドイッチを口に運んだ。

## アイドルいんざすくーる（未デビュー）

橘ありすは普通の小学生である。

朝起きて学校に行き、真面目に授業を受け、人並みに友人と歓談する。少し大人ぶりたいお年頃の普通の真面目な女の子だった。

（ぐっすり寝てます……）

——真面目な女の子だからこそ、橘ありすは授業中にも関わらず隣でむにやむにやと満足そうに旅立ってしまったクラスメイトに気が気でなかった。

ブランドール・スカーレット。

自分の名前とは違い完全に海外のそれ……なのだが、机をピタリと合わせたアリスはどうもそのフランの日本人然とした云為にピンと来ていなかった。

透き通るような黄金の髪に、苺のムースみたいに赤い瞳。極めつけはペンキで丁寧に塗装したかのようにムラ無くきめ細やかな白い肌。

整つてると言うどころか、ありすから見ても完璧という他なかった。

そんな海外製の西洋人形さえ思い起こさせる容姿の癖にこのフランという少女、日本語は完璧だし箸を器用に使い熟してるし勿体無いか言って折れた鉛筆を机の中に放



り込むし。

なんというか、容姿以外は完全に日本人なのだ。

(……私の方が集中できない)

チラチラと目に入るフランの寝顔に思わず視線が惹かれてイマイチ黒板に焦点が合わない。

寝息こそあまり立てていないので先生には見つかってないが、それも時間の問題だろう。

少しの親切心を胸に、意を決してアリスはフランの左肩を突いた。

「……スカーレットさん。授業中ですよ」

反応。無し。

フランは最高級のマッサージでも受けてるかのように、気持ち良さそうに机に伏したまま動かない。

(どうしたんだろう……スカーレットさん、普段は起きてるのに)

思わず脳裏に思い浮かべたのはいつもの隣人の姿。

勤勉、とまでは行かなくともいつもは時折欠伸をしたりノートに落書きしながら起きて授業に臨んでいる。眠そうに半目になることはあれど、ここまでガッツリ寝に入ったことはありすの覚えている限りではなかった。

「スカーレットさん……」

もう一度！、と先生の間を縫ってフランを揺らしてみるのが結果は変わらず。スピースピ、と此方まで眠くなってくる程の良い表情で目を閉ざしている。

……もういいかな、なんて諦めが芽生えそうなるのけど踏みとどまる。

——なんか、よく分からないけど負けた気がする。

当初の理由は突風に吹かれたように消え去り、今ありすの心中でジリジリと燻っていたのは謎の敗北感だった。

悔しい。

勝手に戦って勝手に負けた気がする。

ありすは持っていたシャーペンを机に置いた。すると、コロコロと傾斜に逆らえず転がって落ちそうになって、慌てて阻止すると今度はペンケースへと戻した。鉛筆なんて子供っぽいと両親に買ってもらった大切な仕事道具（文房具）である。

ともかくだ。

普通にやってもこのクラスメイトは絶対に起きない。何故かは分からないけど熟睡してるのだ、身動き一つしないレベルで。

どうすれば起きるだろうかと考えてみて、やっぱり声で起こすしかないと思いついた。ありすは口を耳に近づける。自然と視線はフランの耳たぶに流れた。

(白い……柔らかそう……甘い匂いがする……ってそうではなくて!)

頭をブンブンと振って、目を閉じて今度こそ耳元に唇を近づけた。

「スカーレットさん、授業中ですよ」

「ふにゃ!」

囁くと、まるで尻尾を踏まれた猫みたいにフランは飛び起きた。だが、まるでサバンの獣みたいだなあ、なんて感想を抱く余裕はありすにはなかった。

「?!?」

突然頭を上げたフランの耳たぶはありすの唇と接触する。仄かな暖かみが過ぎったのは一瞬で、すぐに耳たぶは通り過ぎてしまったけれど。

……確かに、フランの暖かみはありすの唇を直撃した。

「……アレ、私寝てた? 橘さん起こしてくれたの?」

「そ、そ、そうですけど……」

口と口ではないとは言え、10年間生きてきたありすにとって初めての他人とのキス。しかも同性。だけど美少女。

端的に言えば、この刹那の出来事によってありすは冷静さを欠いてしまったのかも知れない。

「す、スカーレットさん。これは違います、その、事故というか、他意は無いんです……」

「！」

「……………なんのこと？」

言つてから、しまった、と思つたありすだったが。

コテンと、眠そうに目を擦りながら堂々と欠伸をしたフランはありすの言葉にクエツションマークを浮かべていた。

（……………もしかして寝起きで気付かなかつたのでしょうか？）

なら好都合です、と少しの罪悪感を抱きながら嘘を吐こうとして。

——運が悪かつたのは、そこにいたのはフランとありすだけではなかつたことだろう。

「スカーレットちゃんに橘ちゃん……先生は女の子同士のもういふには疎いけどね、でも授業中にやるのは駄目だと思ふの」

「??？」

ぬくつと。

気づかない内に先生は、静かにありすの席の横に立つていた。

その目はとてもとても穏やかな視線で、同時に気持ち2歩くらい何時も会話してるときより距離が開いているような気もした。

「ち、ちち、違います！誤解です！」

「……ふえ？ありすどうしたの？」

「大丈夫、先生は分かっているから。何かあったら私を頼ってね」

と言いつつもやはりありすと先生の距離は机一つ分は離れている。

結果だけ述べれば、ありすは先生の誤解を解くことに失敗したのだった。

「……巻き込んだりやってみたんでごめんなさい」

昼休みになると、訳を知ったフランは申し訳なさそうに頭を下げた。

それを微妙な面持ちで眺めるありす。

先生への誤解は解けていないし、誤解があったことはフランは知らない。ただ寝たことを注意されただけと想っている。

「あの……気にしないで下さい。それよりスカーレットさんが寝ちやうなんて珍しいです  
すね」

「まあね。ちよつと最近疲れ気味でさ」

ふわあ、とフランは大き目の欠伸をした。

疲れているというのは本当らしい。

「……つかぬことを伺いますけど、何か運動でも始めたんですか？」

「これまだ公式に発表してないし言っただけのいいのかなあ……うん……」

「あの、無理なら全然いいですよ」

「……まあそうだね。敢えて言うなら水商売かな？」

そうですか、水商売。………水商売!?

ありすは驚いて再び口を開いて欠伸しているフランを2度見する。

（——不健全です！いやでもまさかスカーレットさんがそんな……でも水商売って夜のお仕事だし……）

なけなしの知識を駆使して一応想像してみる。

脳裏に浮かんだのは雑然とネオンが煌めく夜の繁華街。キャバ嬢としてフランが手を振る姿。

駄目だった。犯罪臭しかない。

「スカーレットさん駄目です、そんなところで働くななんて危ないです」

「危なくないよ？ちゃんと守ってくれますし」

「でもそんな夜のお仕事なんて……」

「……………ん？いや違うよ？」

「……………へ？」

「そうだなあ……………オフレコでお願いしたいんだけど、私、アイドルになるんだ」

あまり表情を変えず行つた言葉にありすは固まった。

アイドル。あいどる。aidoru。idol。

……………アイドル!?

「ごめんなさい……………水商売と聞いて勘違いしてしまいました……………」

ありすの中で恥ずかしさやら申し訳なさやら、色んなものが駆け巡る。

視線を合わせられず、林檎みたいに熱さを伴って赤くなつた頬を俯かせた。

水商売と聞いていの一番にそういう仕事を浮かべて、あまつさえそれをフランに投影

してしまった……………なんて、あまりにも自分が恥ずかしい。

「ど、どうしたの？よく分からないけど、別に何とも思つてないわよ？」

「そ、そうですか……………」

チラリと表情を確認してみる。

フランは少し憂うような表情で目を細めていた。机で伏していたせいかトップには

アホ毛がちよこんと立っている。

「それより今の話他言無用だからね？」

「いいですけど……アイドル、なんですか？」

「うん。なんかスカウトされた」

「芸能とか良く分からないですけど凄いですね……」

「ありすも可愛いから他人事じゃないと思うの」

「あ、ありがとうございます」

反射的にお礼を言ってしまったけど違う気がする。

ありすは少し暑そうにしながら、水筒の水を口に含んだ。

「武内とか絶対ありすの事をほつとかないよ、うん」

「その、ありすって呼ぶのは止めてくれないか」

「え？もしかして私マズった？」

「……いえ、ありすって名前。子供っぽいですから好きじゃないんです」

橘ありす。

ありすなんて名前、日本人っぽくないし、子供っぽいし、メルヘンチックだし、あまり人から呼ばれたくなかった。

ありすという言葉がどこか小さな子供を思い浮かばせるのはきつと童話の不思議の国のアリスを自ずと連想してしまうからだろう。

「それに表記するときは平仮名なのも嫌なんです。クラス名簿を見てみると、皆漢字の



中で私だけ仲間外れみたいで……」

「そつか……でも私はありませんって名前、良いと思う」

「……ありがとうございます。でもそれは、スカレットさん個人の——」  
「良いから聞いて」

フランはさつきまでガツチリと瞼を落としていたのが嘘だったみたいになり、真剣な面持ちでありすの顔を見た。

「ありすはフランドール・スカレットって名前、お世辞抜きにどう思う？」

「どう……と言われましても。もう2ヶ月も隣の席ですし、特に何も」

「でもフランって言うのはカスタードの入ったパイのことで、ドールは人形。スカレットに限っては和訳して緋色だよ？可笑しいと思わない？だって名前って何かしらの意味が籠もってるものじゃない？これじゃあ、私、菓子細工みたいじゃない」

「は、はい……」

突然の自虐に、ちよつと困惑しながらありすは相槌を打った。

構わずフランは続ける。

「それでも。例えば私が何であろうと、私はフランドールなの。何で分かる？」

「……全く分かりません」

「それがこの世界で唯一、私を意味する名前だから」

——自分の名前に強い誇りを持っていて、羨ましい。

そう思って改めてフランの顔を見たアリスは、自信に満ち溢れたニヒルな表情を浮かべていると思って——視線が囚われた。

それは、無風にも関わらず月下で湖面が揺らいでるみたいに、奇妙な感覚だった。

まるで、フランドール・スカレットという容れ物から中身が無くなったような、何かが抜け落ちたような相貌はありすに強い違和感を抱かせた。

ありすが瞬きをするとそんな顔はなかったかのようにフランは先程の表情を取り戻していた。

気のせいだったのだろうか。いやきつと気のせいなのだろう。

「……私には、そこまでの自信は持ってません」

寂しげに瞳を曇らせ、ありすは俯いた。

フランほどの自己肯定感なんてありすには持ち得ていない。

外国人故の血統から来る自信なのだとしたら、やはり、ちよっぴり羨ましいと思う。

（……いえ。本当にそうなのでしょうか）

ほんの僅かに見せた、色の失せたフランの顔はともそうには見えなかった。

付き合いの浅いありすにはそれが何かだなんてきつぱり分からない。分からないけど、きつとあまりよくないものだと思う。

フランは少し残念そうに、笑みをこぼした。

「そっか……でもさ。それってとても悲しいことだと思うの」

「え？どうしてですか？」

「一生使う名前なのよ？それが嫌いだなんで、生きづらいじゃない」

——それもそうなのかも。

フランの言っていることは一理も二理もある。これから何度も呼ばれる名前を一々毛嫌いしていたら、現実的に過ぎしにくことこの上ないだろう。

「……そうだ！良いこと思いついた！」

「良いこと？」

思わず付き返すみたいにオウム返ししてしまう。

フランは本当に、世紀の大発見でもしたかのようにニコリと笑みを零しながら口を開いた。

「ありす、私と名前を交換しない？」

「名前を……交換ですか？」

名前交換と聞いても一切ピンと来ない。

ありすは少し考えてみて、「もしかして私がスカーレットさんの名前を名乗って、スカーレットさんが私の名前を名乗る……ということでしょうか」

「その通りだよ。だから今日から私がありすね」

「え、あの。まだやると決めた訳じゃ……」

フランは戸惑うありすの肩に手を置いた。

「……私が思うに、ありすに足りないのはメタ認知だと思うの。自分のことを客観的に見れてないから、私的な偏見が多すぎて自分の名前を正当化できてない。要するに自分の中でありすという名前に納得できてない。なら一度、それを人の視点から見てもみるのが良いんじゃないかしら」

だから名前を交換しない？、とフランは言った。

名前は好きではないが、別に自分の名前が嫌いな自分が嫌いなわけではないのでありすは悩んだように「うー」と言葉にならない声を上げる。

「ほらほら、それにそうすれば貴方も今日からフランドールよ？」

「私がフラン……ですか」

「ありすと一緒で漢字じゃないし、そもそも日本人の名前じゃないし、丁度いいじゃない？ なつちやえよユー」

「は、はあ」

こんな気安かつたつけ？とも思うが、良く良く思えばありすはフランとそこまで会話をしたことがない。

フラン自身も話し掛けられなければずっと本を読んでいるし、ありすだって同じだ。似たもの同士が集まれば自然と会話も弾み——なんてことはなく、ただ互いに読書しているのみ。ちゃんと話したことなんて、多分ない。

なのに、名前の交換なんて。

親友でもなく、あくまで普通のクラスメイトで隣人なだけなのに。

「……なんでそこまでしてくるんですか？」

「え？」

つい、口が突いてしまった。

言った瞬間に罪悪感で胸が疼くが、それでも猜疑心を胸に抱えつばなしよりは良いだろうとありすは前向きにフランの瞳を覗き込んだ。

「失礼ながら……私とスカーレットさんってそこまで深い仲でもないですよ。ここまでする理由なんてないはずですよ」

本心だった。

言い過ぎたような気がしなくもない。フランは然程傷付いた様子は見せていないのが救いだった。

フランは少しの俊巡も見せずには答えた。

「だって、私、ありすと友達になりたいんだもの」

「……え」

「実は前から思ってたの。いつも隣の席でちょこんと座ってる女の子と友達になれたら良いなあって」

——それって、私のことなのかな。

気恥ずかしさから、急激にそのプニプニとした頬に熱が集まった。

「んでもさ、私ってコミュニケーション能力が低いから話しかけられなかったの。臆病だしね。だから今日話しかけてくれて正直嬉しかった」

「そんな、私はただ起こしただけですよ？」

「それでもよ。こんなならもつと早く授業中に居眠りしてれば良かったわ」

「それは駄目だと思います」

もしフランが4月から授業中に寝てしまうような不真面目な人間だったならありすは欠片も起こそうとは思わなかっただろう。そんな奇妙な自信に、心の中で苦笑いする。

ともかく、返事は決まっていた。

ありすは平然とそんな恥ずかしいことの言えるフランに少し嫉妬心を感じながら、口を解いた。

「——いいですよ、私もその……、スカーレットさんと友達になりたいです」

鼓動が逸る胸に、緊張しながらも言い切った……!

後に、この時がこれまでの人生で一番緊張しましたが、とありすはフランの突飛な行動に振り回されて嘆息しつつも小さく微笑んで言うのだが、それは別の話。

フランは満面の笑みを浮べると、

「フラン。友達なら、名前でもいいわ」

「ふ、フラン……さん」

「さん付け禁止!リピートアフターミー、フ・ラ・ン!」

「フラン……さん」

「ん……まあ今はそれでいいか」

少し納得が行かなそうな顔をしながら、フランは腕を組むと頷いた。もしここに彼女のプロデューサー<sup>3</sup>がいたら「どの立場から言ってるのさ……」とボヤいていただろう。

「——つてことで、今日からよろしくねありすちゃん♪」

……え?フランちゃん?なんで?

緊張が解けて胸を撫で下ろしたありすに、フランの高速スライダーのような強烈な一言はその脳味噌を麻痺させるのに十分な威力を秘めていた。

「あの……どういっ?」

「さっきの話だつて。名前を交換しようつて言ったじゃん。これから私がありすで、あ

りすがフラン。ね？簡単でしょ？」

「了承した覚えはないですけど……！」

「アレ。……フランちゃん、駄目？」

「橘です！なんでちよつと楽しそうなんですか……!？」

……友達になったの、間違ったかな……？

ありすは少しだけ、ほんの少しだけ後悔した。